田中茂公著

火災運命觀

發行所　不老禪宮

始

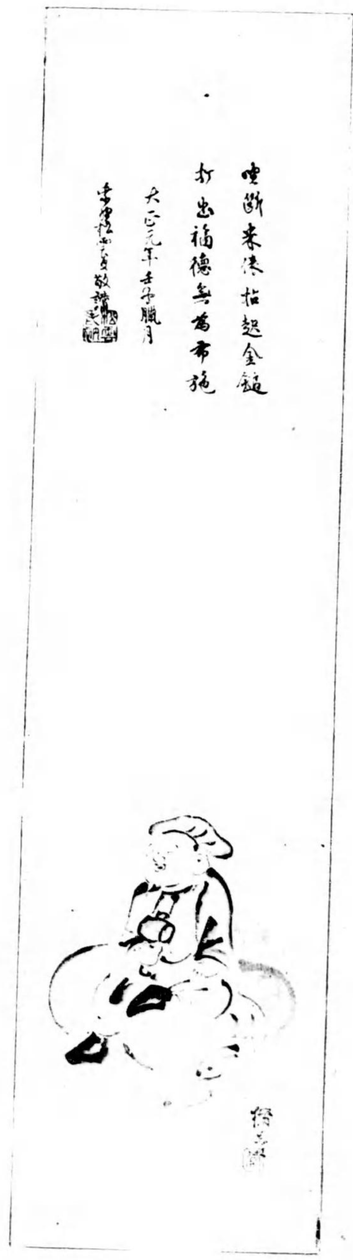
特105
164

火災運命觀

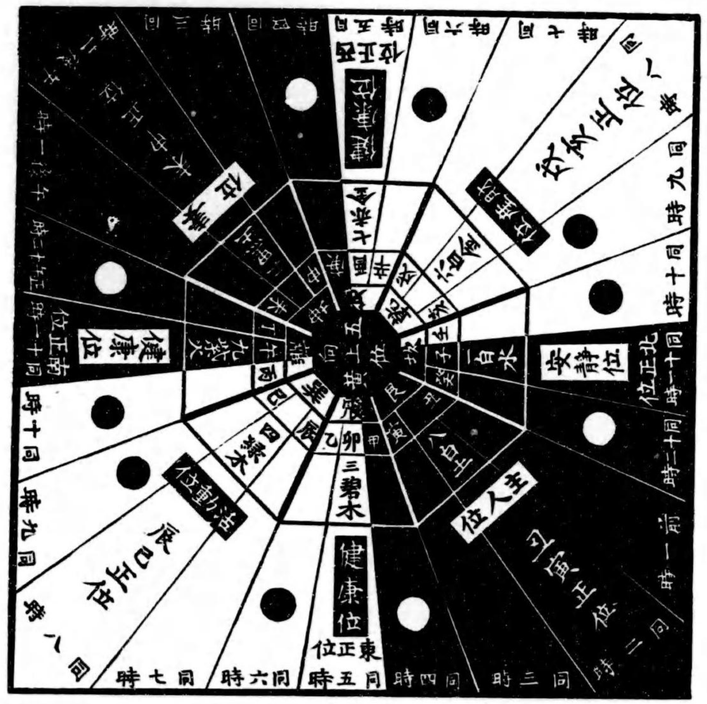
大正
5. 7. 6
内交

慈雲尊者筆

菅楯彥畫伯筆（大德寺管長松雲禪師賛）



出火系發見定盤



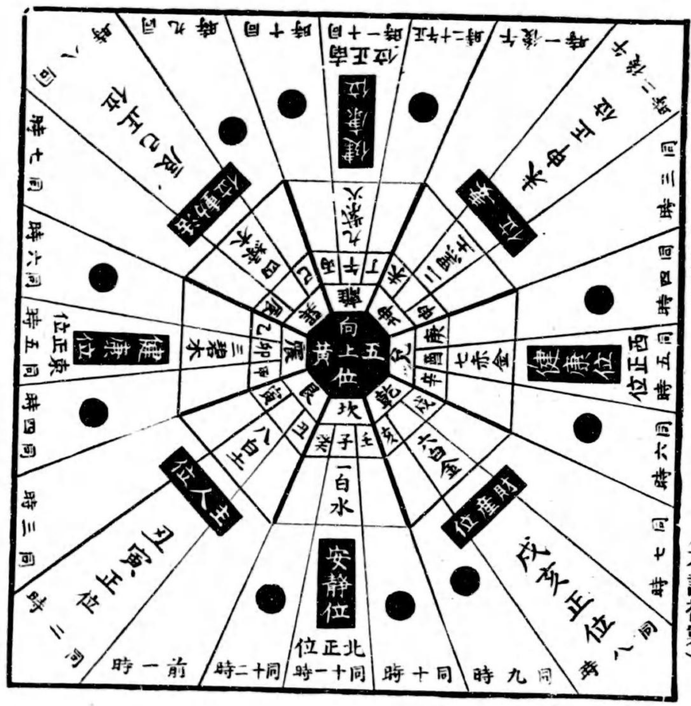
此定盤は家相部位發見定盤上に出火系を示したるものなり。

▲**出火系**　は午後十一時より午前四時、午前十一時より午後四時、即ち丑寅及び未申を中心としたる黒色の部位とす。

▲**起點**　は午前一時より三時及び午後一時より三時の範圍なり。

▲**注意**　此定盤は複製を許さず、入用の向には分與す。

家相部位發見定盤



○注意丑寅と未申は起點なり

(不許複製)

主人位　家又は地相の主人位に故障あれば主人が病弱か死するか嗣子なきか破産す

妻位　此部位發達せば後家となり侵せば死すか病弱なり

財産位　此部位に藏あれば發達す若し故障あれば必ず損害をなして貧なり

活動位　此部位發達すれば子に良縁あり家繁昌す若し故障あれば良縁なく且つ萬事澁滯す

健康位　此部位に不淨又は傍位の建物あれば必ず家庭病弱なり

安静位　此部位活動せる一家必ず亂る

向上位　此部位障害あらば子孫育たず。又腦病者白痴を生ず。

傍位　此部位の(●點)に雪隱、竈、井戸等附屬物を設けよ

目次

一　緒言……（一）
二　火災研究の端緒……（五）
三　大阪の大火と其系統……（一〇）
四　東京の大火と其系統……（一七）
五　岸和田紡績分工場の火災……（三六）
六　三井物産神戸支店の火災……（四一）
七　名古屋田中織物工場の火災……（四三）
八　大阪瓦斯會社岩崎工場の火災……（四九）
九　阪堺電車事務所の火災……（五三）
十　大倉組大阪支店の火災……（五六）
十一　大阪回生病院の火災……（五七）
十二　東京増上寺の火災……（六四）
十三　能登總持寺の火災……（七三）
十四　播州新清水寺の火災……（七七）
十五　出火と起點の關係……（八〇）
十六　火災豫防論……（九〇）

目次終

家相部位發見定盤に就て

私は、古來廣く行はれ來つた家相部位なるものを、殆ど荒唐無稽の説であると信じた結果、家の部位には八位、即ち主人位、妻位、財産位、活動位、健康位、安静位、傍位向上位のある事を發見した。さうして之を二十四時間に配置したのが別掲家相部位發見定盤であつて、午前一時の位地、即ち丑から起つて寅に移り、循環して午後十二時の位地、即ち子に盡きるので、丑寅を陽の起點、未申を陰の起點とし、更に陽の起點を以て家全体の起點としたのである。未だ私の定盤を知らざる人の爲に、左に畧解する、詳細は拙著「移轉運命觀」を讀まれたい。（田中生）

主人位

家は獨立のものに非ずして、主人あつて始めて其機能を生ずる。故に家の第一の位地は主人の位地であつて、主人の位地完全無缺ならざれば、家の面目を保つことは出來ない。即ち主人位は陽の起點たる丑寅である。家は主人に依て起る。而して男子は陽である。故に家其ものゝ起點でもあり時ならば春、陽の將に起らんとする丑寅を以て主人位としたのは最も自然で、何者の侵害をも許さない、最も重要な

部位である。

妻位

一家に於て、主人に次ぐものは妻である。即ち陰の起點たる未申を以て妻位とする。未申は、時ならば秋、日は午後一時から三時までが、午後は陰である。婦人は陰である。故に未申は、妻の部位にして又婦人の部位である大切なること主人位と同様、聊かの障害をも許さない。若し障害あらば、妻侵害せらるゝか、一家の婦人に侵害を蒙らねばならぬ。

財産位

金は生命から二番目だといふ、金なくては一日も生活することは出來ない。故に家相に於ても、主人位妻位に次ぐものは財産位、即ち金の部位である。財産位は戌亥とする。金の位地は藏の位地、收穫の位地、活動せざる位地、入る事の盛なる位地でなければならぬ。戌亥は時ならば晩秋で、即ち一年中の收穫をなすの時である。日ならば午後七時から九時の間で、一日の勞役を濟ませ、一家休息の時即ち活動せざる時である。財産位鞏固ならざれば家産を保ち難く、故障があれば必ず損害を受け、且破産する。

活動位

次に大切なるは活動の部位である。活動は人たるの本分であり、又活動しなければ、生活に重要なる金を得、財産を得る事は出來ない。活動位は辰巳である。辰巳は日ならば午前七時から九時の間、時ならば初夏で、共に陽氣の最も旺盛な時である。此部位は清淨にせねばならぬ。若し藏を建つるならば戌亥の藏の後にし且商品、米穀の藏とせねばならぬ。何となれば辰巳は戌亥と異り活動の部位で、活動の結果を表彰して居るからである。特に商工業家は此辰巳に注意を要する。

健康位

次は一家の健康の部位、即ち東西南の正位を以て健康位とする。此三正位は空氣、光線の流通最も宜しく、鬱陶の氣を拂ひ、家其のものが健康となる。家健康とならば住む人も亦健康となり、即ち家と人と合致して、人、家を感化し、家、人を助くることゝなる。

安靜位

安靜位は北の正位である。時ならば冬で收獲を終り、日ならば午後十時から十二時の間で勞役を終り、悠々一年或は一日の疲勞を癒すと共に、徐ろに來年或は明日の活動に對する英氣を養ふの時で、詳說の要はあるまい。休むべき時に休まず、此部位、不自然に活動せば、一家は必ず亂れる。

傍位

其次は傍位、即ち定盤にある●點の部位で、便所、井戸、竈、門、走水等一切の家の附屬物を置くべき位地である。此傍位は家の正位を衝かず、之を避けて居る處に言ひ得ぬ妙味がある。即ち正位は主人、傍位は奉公人の如きもので、主人に柔順に服從して居る事を表彰する。若し奉公人たる傍位の附屬物が、主人たる正位を浸したならば、家を紊亂せしめ、家の和合力を失ひ、災害最も恐るべきものがある。

向上位

最後に明かにすべき大切の部位がある。家の中心を明示する屋根、即ち向上位である。家には、或塲合座敷がなくとも住まへるが、屋根なくしては一日も住むことは出來ない。言はゞ屋根は家の頭である。然るに從來の家相家は、屋根に方位が無い爲に彼是いふ事が出來ず、全然閑却して顧みないのみならず一般世人も屋根を大切にせず、頂上に物干や、火の見や、納涼臺などを設けて平氣で居る。謬れるのはなはだ甚しきものである。物干、火の見などは必ず便所、湯殿、物置等の屋上に設くべきもので、若し本家の頂上に是等のものあるか、或は左右低くて中間高きか、左右高くて中間低きか、兎に角缺點ある家は、瘋癲、白痴があるか、腦病患者があるか、不良兒、低能兒あるか、永住が出來ないか、破產するか、少くも五年を出でずして必ず不祥事の發生するものである。

火災運命觀

田中茂公著

發見定盤と參謀本部の將校

一緒言

私が『住宅運命觀』『移轉運命觀』の二著を以て發見定盤を說明して以來、種々なる方面に之を應用した研究が行はれつゝあるのは、頗る注意すべき現象であると思ふ。就中、參謀本部の將校で支那福州の領事館に在りし某氏が態々禪室を訪問された結果、私の發見定盤に依つて支那を研究せんとするに至つたのは、最も異彩とせねばならぬ。

地相に彰れたる清朝の運命

主人位たる滿洲は日本の有

其將校の談に曰く、『貴方の定盤を支那の中央に置て研究するに、活動位に當る香港が英國の領有に歸して居るのは、支那が活動する事の出來ないのを表彰して居り、主人位に當る滿洲を日本の手に委ぬるの止むを得ざるに到つたのは、將に清朝の癈滅せざるべからざるを表彰するものであつて、地相に於ける運命の表彰、眞に不可思議である。

日清戰後の遼東還附に依て主人位の障害を免れ、辛じて一時其命脈を保ち得た清朝が、日露戰後、滿洲の主權を擧げて日本に委ぬるに及んで日に日に衰滅に近づき、遂に果ない最後を遂ぐるに到つた迄の徑路を觀察してみると、主人位たる滿洲の障害が其運命を語つて居る事は明かである。

殊に奉天は主人位たる滿洲の中心でもあり、北朝の宗廟の地で、

定盤と經濟學專攻の法學士

清帝にとつては唯一の尊嚴地である。奉天の盛な時、即ち清朝の盛な時であつた事は、事實の證明して居る處で、其大切な土地が瀆さるゝに到つて清朝の亡びたのは、運命の支配する處とは言へ、如何にしても不思議とせねばならぬ。

更に財産位たる北蒙古は露國の侵掠を受け、妻位に當る西藏は英國の掌中に歸して居る。實に支那の運命といふものは貴方の定盤が之を語り盡して居て餘蘊がない。予は此定盤に依り、北京政府を中心として支那の將來を研究せんが爲、態々訪問した次第である』と。

又、帝國大學で經濟學を修めた法學士某氏も、私の定盤に就て禪室を訪はれた。其話が面白い。曰く、『私共は經濟學を研究して、兎も角も國家又は社會に經濟上の貢献を爲すべく、慘澹たる苦心をしつゝある。然るに例へば或事業なら事業の發展が、土地或は建築の

構造位置等の障害に依る運命の爲に掣肘を受け、其盛衰を左右せらるゝものでせんか、實に由々しき大事であつて、決して輕々に看過することは出來ない。果して眞に斯の如き運命の存在するものであらうか』と。

私は是等の人々と談論を交へ、抑も私の定盤は斯の如き方面にまで研究せられて居るのかと思つて、そゞろに驚かざるを得なかつた。同時に更に研究の歩を進め、此定盤の有せる眞理を闡明しなければならない義務と責任の一層重大なることを自覺した。斯くて先其第一着手として、火災の解決に向つて研究の歩を進むるに至つたのである。

二　火災研究の端緒

私は、私の定盤が上述の如き住宅以外の方面に研究せられて居つても、私として尚住宅に向つて研究しなければならない一大事を眼前に控へて居る。火災、即ち是である。私は地相の撰擇、住宅の構造に依て、運命上火災を免れ得るものと信じ、火災の系統といふことに就て大疑問を抱いた。

總て何事に依らず、系統のないものはない。苟も原因の存在する處には必ず系統がある。隨て住宅と運命の如き、確に理論としてよりも、之を系統的に研究せねばならぬ問題である。

殊に現代の學術は系統的な研究に立脚して居る。醫學者が或黴菌を發見したといつても、例へば動物に植付けて其反應を見るとか、

事實に之を立證すればよい

或は其他の方法であらゆる實驗を講じ、其上に幾多の事實を得て始めて發見といへるのである。

發見は、其理論に適ふと否とを問はず、事實に於て之を立證すればよい。假令理論は整然として居ても、實驗に徵して事實の立證を得なければ發見といふ事は出來ない。何となれば之を系統的に說明することが出來ないからである。

火災系統に於けるも斯の如く、理論として、火は一定の場所から出るといつても、其事實が之に副はなければ何等の價値はない。理論では少々の矛盾があつても、事實に系統があれば、以て眞理となすことが出來る。私は火災の系統を事實の上に得たいと決心して、隨分苦心した。

少しく其事實の方から述べやう。

播州の素封家で廣大な邸宅

昨年(大正二年)の五月であつた。播州二見港の尾上淸兵衛といふ人の請に應じて、其住宅を鑑定したことがある。尾上氏は其土地の素封家でもあり名望家でもあつて、屋敷も隨分廣く、建物も澤山あるが、中々整然として居て、頗る調和を得た住宅であつた。

其時私は出火せられた事はないかと訊ねると、あるといふ。で其出火の場所を觀察するのに、地相の中心から見ても、又住宅の中心から見ても北から東に觸れた、方位上丑に當る方面の二棟の納屋庫から出たのである。

此二棟の納屋庫は從前からあつたものではない。新に建築することになつて、正に竣工せんとする間際に出火したので、原因は大工の煙草の火だといふが、眞否は疑問になつて居る。何分戸を閉じたまゝ、內部から燒けたので確なことは判らぬ。併し出火の場所は、

出火は丑から寅に觸れた處

私の定盤に於て起點と名づける、即ち丑から寅に觸れた處には相違ない。

其翌月、伊勢の松阪町の製材家小津氏の邸宅に出張した。例の如く火災の有無を訊ねると果してある。それがまた不思議で、出火した場所は邸宅ではなく、濱の製材所である。

小津氏の邸宅と濱の製材所とは約十町餘を隔つて居るので、方位を得るに非常に苦心した結果、煙火を揚げさせ、屋根へ上つて調べた末、其方位は、私の定盤の起點たる丑稍寅に當つて居ることを確實に知り得た。出火の原因は、午前一時頃であつた爲、全く不明であつたが、出たのは同地相の北の建物からだといふ。

新築後僅に一年にして全燒

其後、廣島縣雙三郡の人で、態々禪室を訪ふて、『私は新宅を建築したが、僅に一年にして全燒に遭つた。定めて家相が悪いのだらう

本宅と新宅とは起點の對向

と思ふから、再築の爲御相談に上つた』といつた人がある。で其燒けた家の圖面を見るに、別段悪い處はない。

然るに其新宅といふのは、新に別家した次男の爲に建てた家だといふ事實が判つたので、サテはと思つて其本宅の位置を聞いてみると、果然、私の云ふ起點に當つて居る、さうして出火の原因は放火とも過失とも判らぬが、北から出たことは疑ひないといふ。即ち本宅と新宅との對向が起點と起點との對向で、又出火の場所が北であるといふ事實が頗る注意に値するものであつた。

それから八月に尾道市に出張した。橋本氏といつて肥料と麻の問屋で、同市での紳商である。處が此橋本氏の本宅と、濱にある店といふのは、共に近火があつて火の手は壁一重の隣家まで來たが、孰らも燒けなかつた。尤も消防の行屆いたお蔭もあらうけれども、併

壁一重の處で燒失を免れた

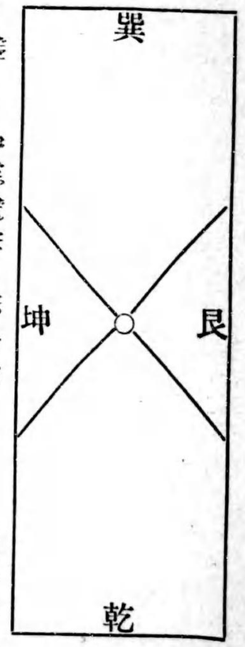
し二軒とも壁一重の處で燒失を免れたといふ事實は、私としては大に研究せざるを得ないのである。

この橋本氏の本宅といふのは、間口が五間だのに奥行が四十五間もあるといふ、頗る不調和な家であるが、一体尾道といふ土地が、間口を狹くして奥行を深くする習慣なのであるから、此不調和を以て非とする譯にはいかぬ。西洋の家と日本の家の異つて居る事などは言ふ迄もない事として、同じ日本でも、其土地の地勢、氣候、人情等の異る如く住宅の構造も異つて居るのであるから、總て地相でも家相でも、其土地の習慣を無視する事は絶對に出來ないのである。

不調和でも凶相とは言へぬ

故に橋本氏の不調和な住宅も、凶相であるとはいへぬ。今其地相の方位關係を見るに

巽と乾との廣大された住宅



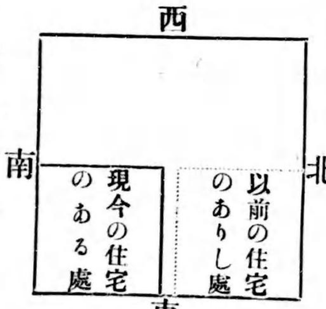
右圖の如く、間口全体が辰己向となり、裏口全体が戌亥向となる。四十五間の中心、二十二間半から見ると、建物全体が辰己と戌亥の對向、即ち私のいふ活動位と財産位の對向となつて、丑寅と未申の起點と起點の對向は、僅に間口五間を両分せられた一部となる。斯の如く起點と起點の狹い地相で、辰己と戌亥の擴大された住宅が、壁一重の處で火災を免れたといふのは、頗る注意せねばならぬ。

又、若州遠敷郡の人で尾中氏といふ、銀行の重役に酒造業を兼ねた土地の素封家が來室されて、圖面を示された。屋敷も邸宅も頗る

燒けない家だと速座に斷言

廣大な構である。私は一見して『此家は燒けない家だ』と速座に斷言したら、氏は愕然として『實に其通です』といつて非常に敬服されたやうであつた。

私は何に依て斯の如く斷言し得たか。其家は地相上、全然火災地點を外れて居たからである。左に其略圖を示す。



此略圖に見る通り、現今の住宅は地相上の辰巳の一角に構造せられて居る。即ち家と地相の調和關係を見るに、住宅は活動位の一角に建築されて居る。私には『財産位と活動位からは決して出火せぬ』といふ自信がある。私の斷言は此自信から速座に發せられたのである。

私は此自信に依て斷言した

氏が驚かれたのも無理はない。私の一言は實に氏の肺腑を衝いたからである。氏の談に據ると、現今の處に住宅を構へたのは明治二年の事で、其後三度まで近火に遭つたが、一度も燒けた事がないのは誠に不思議な位で、即ち明治五年の近火には庇まで來り、明治七年にも、又明治十七年にも本宅の壁を焦すのみにて類燒を免れ得たといふ。

四度まで燒けた歴史がある

然るに明治二年以前、即ち地相の丑寅、私のいふ起點たる主人位の位置にあつた時は、四度まで燒けた歴史がある。自宅からも火を

始めて燒けぬ理由が分つた

出し、又近火にも遭ふて全燒して居る。餘り屢々燒けるので父なる人が今の位置に變へてみたのであるが、偶然にもそれが火災地點を外れて居たといふのは、私の何よりの幸福で、貴方のお說を承つて始めて燒けない理由が明かになつたといつて、非常に喜んで居られた。是は九月の下旬であつた。

又其後、私は大日本麥酒會社の運命を論ずる爲に、同社の吹田の工場、目黑の本社、及び吾妻橋なるサツポロビールの釀造場を視察した。其結果は別に之を論述するつもりであるが、出火の部位に就ては私の斷言が不思議に的中して居つた。

吹田の工場と目黑の本社とは、地相の關係には火災系統を認むる事は出來なかつたが、吾妻橋の工場は慥に火災系統たる地相で、餘程要愼しないと危いものだと思つた。

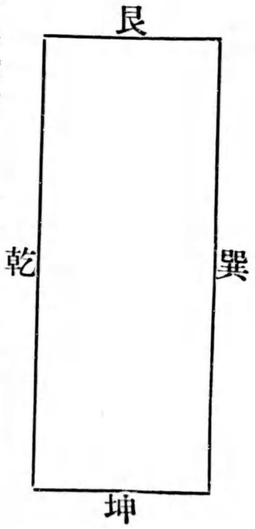
吾妻橋の工場は慥に火災系統

始め有つて終り無き大凶相

私が吾妻橋の工場に工場長矢木氏を訪問したのは、昨年（大正二年）の九月である。同氏の案內で、先門の入口から事務所、及び工場は勿論、一切の建物の調和並に對向關係を視察した。さうして、單に交通の便から言へば、前は隅田川に臨み、吾妻橋にも近く、電車の便も良いし、又場所柄も殷盛な土地で、なか〳〵得易からざる工場だと思つた。

けれども、此工場の建築せられて居る地相を見るのに、其方位が頗る不統一で、私の起点即ち丑寅と、未申とに擴張せられ、始あつて終なき凶相である、隨つて巽と乾とは非常に狹くて、其始終を全うするといふ上に頗る欠点がある。之を略圖に示すと左の如くであ

閉門の上に領地五萬石沒取



私は工場長に、地相の悪いことを詳しく説明した。すると同氏は之を聞いて、如何にも不思議さうな面持で面白い事實を語られた。

それは斯うである。此吾妻橋工場の前身は、實は佐竹侯の屋敷であつたので、其庭園の立派な事に於ては、三百諸侯の内でも稀に見る程で、今尚其俤を一部に留めて居るが、佐竹家の爲には此屋敷は誠に不吉な歴史を殘して居る。それは侯が此屋敷を完成して移轉するなり、其一身上に不祥の出來事が起り、閉門を仰付けられた上に所領の内五萬石を削らるゝの止むなきに到つた事である。故に佐竹

天下に誇つた名園も空屋敷

實は火災をやつて大騒した

家に於ても、此屋敷を不祥のものとして全く住まはない事になり、空屋敷となつてしまつた。天下に誇つた名園も、之が爲に同家の手を離れ、轉々して遂にサツポロビールの工場となつたのである。

私はこの話を聞いて、私の斷言の的中したことに我ながら驚かざるを得なかつた。さうして悪い地相といふものは、其建物を如何に調和せしめても容易に回轉せしめ得るものでないといふことを、事實の上に覺つたのである。

而して佐竹家に累した此地相は、全く私の火災系なのである。そこで私は其事を告げて、餘程の注意を要するといふと、工場長は、實は一度火災をやつて大騒きしたが、幸に消防の設備が行屆いて居た爲に、些少の損害で濟んだ事があると語られた。翌日目黒の本社を訪問して、工場長馬越氏に面會した節も、此工場は宜しいが、吾

總ての方面に凶事のみ起る

妻橋のは火災系統であるから、充分の御注意をなさるやうにと注告して置いた。斯くて私は、又茲に有力なる事實を一得たのである。

一体この火災系の地相は、起點と起點の擴大であるが故に、獨り火災のみの問題に止まらず、家庭といはず事業といはず、總ての方面に凶事のみが起つて、容易に其終りを全うするを得ないものである。夫等の事實は、追々に實例を以て詳論するから、今は火災に就てのみ論ずるのであるけれども、注意までに一言して置く。

斯の如く、火災には地相なり家の構造に依て、何等かの系統の存するといふ事を事實の上に實驗するに及び、有る限の記臆の中から樣々な火災を臆出してみるのに、殆ど全く私の火災系のみである。中にも私の知人で、二度まで火災に罹つた家がある。で其構造はといふに、地相は稍正確であるけれども、本宅を中心として丑寅の起

即ち住宅の構造が惡い爲に

點に物置があり、未申の起點に土藏があつて、之は地相でなくして建築上、家と家とが全く火災系に構造されて居るのである、さうして此家は啻に火災系なるのみならず、家庭にも二六時中紛議が絶えない。即ち家の構造の惡い爲に、火災系となり、不祥の出來事をも生ずるに至つた事實を證明して居るのである。

又私の幼年時代からの記臆に據て、實見した火災の出火部位を心に描いてみても、思ひ當る事が頗る多い。又個人に就て、一々火災の有無を質して、其出火の部位を推考してみても、私の火災系統を離れたものは一もないのである。

是等の事實が端緒となつて、私は更に一歩を進め、舞臺を少し大きくとつて、先づ古來の大阪の大火に就て其系統を研究してみた。

最も有名なる大阪の六大火

三　大阪の大火と其系統

大阪には徳川時代に入ってから、最も著しい大火が六つある。

第一は享保九年三月二十一日の大火で、金屋妙智の宅から出火したので、俗に之を妙智焼といふ。

第二は天保八年二月十九日の大火で、俗に大鹽焼といふ。即ち大鹽平八郎の騒動から起つたからである。

第三は文久三年十一月二十一日の大火で、俗に之を新町焼といふ。

第四は明治二十二年の大火で、之も亦新町焼といふ。

第五は明治四十二年七月三十一日に北區空心町から出火したもので、北の大火といふ、

何か系統があるに相違ない

第六は明治四十五年一月十六日に南區難波新地から出火したもので、南の大火といふ。

此六つである。

私が此六大火に何か系統があるに相違ないといふ疑を起したのはいふまでもない事で、何となれば、小火に一定の部位があり、系統があれば、大火にも亦一定の部位と系統が無いといふ筈はないからである。

で先此系統を探るには、是非とも中心を定むるの必要がある。中心を定めないでは、方位上の關係は勿論、其系統を證明することが出来ない。隨て大阪の中心は抑も那邊であるかといふ事が先決問題である。

大阪の大火は文字の如く大阪の大火で、個人の火事ではない、殊

始は個人の出火から起つた

大阪の中心點は船場である

に此六大火の如き、大阪にとつては實に計るべからざる大損害を與へたものである。尤も市民個々としても各々多大の損害を蒙つて居るし、始は個人の出火から起つたのであるから、個人の家にも其中心を求めて、出火の部位系統を明かにすべきは勿論で、此場合には二の系統を論ぜねばならぬが、それは後に讓ることゝして、單に大火として論ずる日になると、其土地を標準とし、其土地に中心を定めなければならない。此理由に依て、大阪の大火も大阪に中心を定め、其部位系統を調べるのが當然である。

抑も大阪の中心は何處であらうか。私は地圖を展げてみて、それは船場であるといふ斷定を下した。大阪を代表する富の上から言つても商業の發展といふ上から論じても、地勢の上から斷じても、船場が大阪の中心である事を否定する人は恐らくあるまいと思ふ。

正に部位もあり系統もある

九萬八千戸燒失した妙智院

大閤秀吉が大阪城を築いてから殆ど四百年、其間幾多の變遷を歷史の上に止めたけれども、船場が大阪の中心である事は、大正の今日と雖、依然として昔日に異らない。

然らば其船場の中心は何處か。それは當然本町三丁目邊であらねばならぬ。或は稍北に觸れて安土町に接するかも知れないが、孰れにしても同じ事である。

で此本町三丁目を中心として、大阪の大火系を調べてみると、儼然として正に部位もあれば、系統もある、眞に不思議とせねばならぬ。

第一の享保九年の大火は、其出火場所は西區南堀江通二丁目金屋妙智の宅で、燒けた家が實に九萬八千戸、殆ど大阪の大半を焦土と化し、死んだ者が三萬人あつたといふ、悲慘極まる火災であるが、

一萬八千戸焼失した大塩焼

火元たる南堀江通二丁目を船場の中心から觀察するに、南より西に觸れたる未申の正當にして丑寅の反對たる對向で、即ち私のいふ起點である。

第二の天保八年の大塩焼は、天満與力町から出火して天満一圓を焼拂ひ、更に淀川を越えて船場にまで飛火した。焼失戸數一萬八千三日が間焼け續けたといふ、之亦有數の大火である。此天満與力町を中心たる本町三丁目から觀察するに、之は南堀江と反對の方位で即ち丑寅といふ、之亦私のいふ起點の部位である。

二萬三千戸焼火した新町焼

第三の文久三年の大火は、西區新町橋東詰から出火し四日間に亘つて遂に玉造まで焼け拔けたといふ有名な火事で、二萬三千戸を灰にした。此新町橋を本町三丁目から見ると、矢張南堀江の妙智焼と同じ方面で、即ち丑寅の部位、私のいふ起點に當るのである。

二千戸焼た新町九軒の大火

一萬二千戸焼けた北の大火

第四はまだ土地の人の記臆に存して居やう。明治二十二年新町九軒から出た大火で、之は前のに比べると頗る小さいけれども、それでも二千戸焼けて居るから、無論大火の部に入れねばならぬ。此新町九軒が起點の未申に當ることは説明せずとも分り切つた話である

第五は、まだ吾等の記臆に新しい北の大火で、明治四十二年七月三十一日拂曉、市民の夢を破つて北區空心町二丁目の玉田莫大小店から出火した。此日は朝來大風であつた爲、可なり發達して居た、消防機關も殆ど其力及ばず、百十個町、一萬二千戸の家を嘗め盡して大阪人の心膽を寒からしめたが、此空心町の出火點を求むるに、全く大塩焼の如く、丑寅の起點であるのは實に奇しき運命といはねばならぬ。

第六も亦、今尚吾等の眼前に髣髴たるを覺ゆる位で、明治四十五

千日前の全滅した南の大火

年一月十六日午前一時、北の大火の盛夏とは反對に極寒の最中、南區難波新地二番町の百草湯といふ湯屋から發火して遊女遊客を狼狽せしめた。燒失戸數五千、損害一千萬圓、千日前の熱鬧場を一夜にして荒野と化せしめたのみならず、實に官幣大社生國魂神社の社殿神苑をも一甞にしてしまつた。出火の原因は百草湯の煙筒にあつたが、其の煙筒といふのが百草湯の中心から北稍東に觸れた丑寅の部位で、即ち私のいふ起點であるが、更に難波新地二番町を本町三丁目から觀察すると、南から西に觸れた未、私の午後一時の部位で、正に出火系である。即ち堀江、新町橋と其系統を同じくして居るのであるが、唯難波は、南から西に觸れた點が新町よりも少くて、午後一時と三時との差があるのみである。（定盤參照）

火の出た煙筒も起點に當る

以上の事實に依て、大火にも一定の系統あることを、私は確實に信じ得た。讀者諸君も必ずや之を首肯し得られた事と信ずる。

火事は何故に江戸の名物か

茲に於て私は、東京の大火にも矢張大阪の如く一定の系統ありや否やといふ事を觀察せん爲、昨年（大正二年）九月に上京した。東京の大火にも果して系統があつたか。

四　東京の大火と其系統

抑も東京で大火といへば、大抵は神田か吉原で、大江戸以來の名物である。斯の如く神田と吉原が大火の歷史を繰返すといふのには其處に何等かの原因がなければならぬ。其原因を明かにせずして、漫然歷史は繰返すとか、一度あれば二度あるとか、輕卒に斷じてしまふ事は出來ない、私は大火系を調べるに到つて、一層此感を深くした。

速座に斷じ得る東京の中心

偖、東京の大火系を研究するには、先に大阪の大火系に於て論じた如く、第一に東京の中心を定めなければならぬが、試に市圖を展げてみるならば、それは速座に斷ずることが出來る。假令地圖を見なくても、苟も日本に生れた程の者ならば、誰一人として異論を狹む餘地のない程、明白な中心がある。千代田城、即ちそれであつて位置から見ても地勢から言つても、正に東京の中心たるに疑なきのみならず、畏くも　聖上陛下の御居城たる上からは、誠に日本の中心と申さねばならぬ、そこで愈よ中心は宮城と定めて、出火の部位、系統を研究してみやう。

最も有名な明暦の振袖火事

先東京に於て最も有名なのは、明暦三年の大火である。俗に振袖火事と稱へ、三晝夜に亘つて全市を貫き、芝まで燒拔けたといふ未曾有の大火で、火元は本郷丸山町である。之を江戸城から觀察すると、北稍東に觸れた、即ち私のいふ起點であつて、大阪の大火系と同一である。

燒出された吉原は又火災系

吉原は、この明暦の大火に燒出されて今の土地に移つたのであるが、不思議なのは、燒出された吉原が、全然火災系から火災系に向つて移轉して居ることである。即ち現在の吉原其ものが亦火災系だとは、隨分奇しき因緣といはねばならぬ。

明暦三年以後にも屢次大火は繰返されて居るが、大抵は吉原か神田である。其一二をいへば、

箔屋町松枝町猿樂町の大火

明治十二年五月二十六日に箔屋町から出た大火は戸數一萬六百十三を燒拂ひ、

同十四年一月二十六日松ケ枝町から出た大火も矢張一萬六百三十七戸を燒き、

出火三十四回全滅が十四回

同二十五年猿樂町から出た大火は八千六百戸を燒いた。

是等出火の部位を、中心たる宮城から觀察するに、皆北から東に觸れた起點から生じて居り、明かに大火系統たるを事實に證明して居る。

更に大正二年二月二十日、三崎町の救世軍から出火して三千餘戸を燒拂つた大火も、亦宮城からは北稍東に觸れた位置である。

飜て吉原の大火を觀るに、明曆三年に移轉して以來實に三十四回の多きを數へ、其内吉原遊廓の全部が灰燼に歸した事が十四回に及び、明治に入つてからでも五回燒けたといふに至つては、唯々驚くの外はないといふ次第で、よくもそんな土地に平氣で住んで居られたものだと思ふ位である。

私は吉原の地勢を仔細に觀察して、火災の頻繁な所以を明瞭に首肯し得た。吉原は、獨り宮城を中心としたる火災系なるのみならず吉原遊廓其土地一切が火災系なのである。

大門と遊廓事務所と全地相

私は先づ大門に磁器を据えて、大門と、遊廓の全地相との對向を觀察したが、全く私の火災地點といふ、起點と起點の對向で、丑寅と未申に發展した地相である。

殊に、大門と遊廓事務所との對向が、頗る凶相の相對で、單に火災のみならず、紛擾に紛擾を重ね、問題に問題を生じて、始あつて終なしといふ對向である。

火災の頻繁なのは當然の話

此事務所と大門との二大關門が大火系で、遊廓全体が之れに包まれて居る地勢である限りは、火災の頻繁なのは當然の話で、私はつくゞと其不祥の相に驚き、私の實驗に對する歷史の證明の明かなるに、更に驚かざるを得なかつたのである。

運命の初一歩は此處に發す

すべて會社とか、遊廓とかいふものは、住む主宰者がなくて、其主腦たる點は人の出入と、事務の整理である。運命の初一歩は此處に發するものとしなければならぬ。其出入の關門と、主腦たる事務所に障害がある以上、到底不祥たるを免れないのは必然のことである。

大火系に包まれた淺草神田

吉原と神田とを宮城から觀察するに、共に其全部が丑寅の起點に包まれて居る。先づ錦町、小川町が丑寅の中心となつて展開せられ淺草區を貫いて吉原に伸び、丑の方面は一ツ橋、神保町、猿樂町を貫いて三崎町に出て、それより本郷を貫通し、寅の方面は美土代町新銀町、和泉町から伸びて淺草區に通じて居る。

之を以て見るも、淺草と神田とは大火系の同一運命の下にあつて日本橋、本郷の一部が両性といふ有樣である。

伊東工學博士の神田大火論

而して最も不思議なのは、神田の錦町、美土代町、猿樂町、神保町の家を方位から觀察するに、間口が大低起點たる丑寅と未申の對向である。共に火災系なる事を表彰して居る。然るに銀座通の間口には辰巳と戌亥の對向、即ち其發展が東京市を代表して居る堅實な對向で始あつて終ありといふ表彰である。私は此點から、更に歩を進めて研究してみたいと思ふ。

神田の大火に就ては、學者の方面に種々研究せられて居る。其内最も親切な說明をしたのは工學博士伊東忠太氏である。博士は地勢の上から、神田の大火は、小石川谷、指ケ谷方面の谷を下る風力が音羽谷、若荷谷等の風を合せて勢を增しつゝ突進する江戸川谷の風力と砲兵工廠前で合して更に其勢を加へ、順路神田谷を縱貫して神田平野に突出するが故に、神田は大火地點であると論じ大正二年の

地勢と風位と方位上の關係

三崎町の火事も其關係に外ならぬと斷じて居る。

博士の論は甚だよい。併しながら此の風力と地勢の議論を以て大阪の大火系や、吉原の火災の多い理由を説明する事は出來ない、單に神田一部だけの論たるや勿論である。

火災が地勢風位に關係を有する事はいふまでもないことで、彼の函館の如き方位上の關係と地勢風力上の關係と同一協力の下に大火を繰返して居る事實もある。私は何時か一度函館に出張して、親しく火災系を調査したいと思つて居るから、いづれ發表の機會があらうと思ふ。

要するに大火の如きものは、種々なる方面から研究せねばならぬ研究すればする程、事實の眞相を得る事が出來る。私は方位上の研究のみが其全部だとは、固より斷ずる者でないが、併しながら火災に方位を無視する事は斷じて出來ない。世の學者經世家等が此方位の方にも着目し、地相の選擇や建築の構造といふ事を重要な條件として防火を研究するの日あるを、私は信じて疑はない者である。

地相の撰擇と建築の構造上の

以上に依て、東京の大火も矢張大阪の大火の如く、事實に於て正しく一定の系統の下にあるといふことは、最早一點疑ふ餘地はない。序に名古屋の火災系統を瞥見してみよう。名古屋の大火といへば之も亦大低は大須か新地であるが、今、新地を名古屋の中心から觀ると、南から西に觸れた方位で、即ち私のいふ起點である。名古屋の中心は何處かといへば、廣小路と縣廳前の記念碑とを對立せしめた其中間、即ち郵便局邊にあたる。孰れにしても新地が南稍西に觸れて居ることは事實で、大須及び新地は、之を大火系なりと斷じてよいのである。

大火系に出る名古屋の大火

以上に於て、大阪、東京等の大火が、無形の方位上の關係に、何等か運命上の連鎖を持て居ることを立證し得たと思ふ。更に個々の會社、商店等の地相及び建物の構造に、火災の不可思議なる系統あることを立證したい。

五　岸和田紡績分工場の火災

此火災も、私の云ふ火災系から出火した例證とすることが出來る先づ左に大正二年八月一日の『大阪朝日新聞』に掲載された事實を紹介しよう。

●岸和田紡績の燒失

三十一日午前十一時四十分泉南郡北掃守村岸和田紡績春木分工場本館北手工事假小屋より出火し折柄激しき北風に火は瞬く間に本館に延燒したり岸和田署よりは署長以下警官、消防夫を率ゐ岸和田本工場よりは社長寺田甚與茂氏以下社員數十名常備消防隊と共に驅け着け必死に消防に盡力せしも火焰は益々擴がりて作事小屋及び二千八百坪の本館全部を燒き拂ひ原動機室一棟のみを殘して午後三時十五分鎭火したり出火の原因は同日午前十一時機械据付中の男工數名晝餐後前記作事小屋にて煙草を喫み居たるが其の中の職工川越源五郎が煙管を通さんと有合せの鉋屑に火を點じたるが風に煽られて散亂し爲めに工作場に延燒し見る〳〵一面の火焰に包まれたれば百數十名の男女職工及び大工人足は四方に逃げ去りたり其の混雜名狀すべからず職工岸和田町寺田圓吉は本館階上にて工作中なりしが火事と聞き逃場を失ひて墜落し脊髓骨を挫折し重傷を負ひ貝塚消防夫南伊之助を初め岸和田消防夫數十名の輕傷者を出だし附近臨時救護所に早ぎ込み應急手當を施したるが晝間の事なりしかば割合に負傷者少かりき同工場は昨年十月建築費百五十萬圓にて社長寺田甚與茂氏が從來の工場に最新式の

設計により建築したるものにて本年五月本館落成したれば目下米國より諸機械を取寄せ据附中にて殆ど九分通り成就し九月一日より運轉を開始する手筈なりとて女工は機械の研き方に男工は機械の据附方に工場長白水伊三郎監督の下に午前六時より集合して立ち働き居たるなりとかゝる次第なれば未だ保險を附し居らざりしと云へば損害高は約七十萬圓に上るべし川越源五郎は岸和田署に拘引取調中なり

本社と分工場は起點の對向

此火災を取調べる爲、私が出張したのは大火の五日後、即ち八月六日であつた、先づ岸和田の本社から磁器で詳細に調べ、更に分工場より本社の位置を調べたが、果然、私の想像の如く岸和田の本社と春木の分工場とは起點と起點の對向で、丑寅と未申の正位にある即ち此火災も、私が机上で想像して居た如く、火災系から出火したものであるといふ事が判つた。

鬼門に當るから惡いと反對

其日本社の裏手の海岸で海水浴をして居た土地の人に、試みに掃守村の分工場は此處からどういふ方角に當るかと訊ねると、鬼門に當ると答へた。此人は岡田惣吉氏といつて、岸和田紡績の株主で可なり資産家である事が後で判つた。

此岡田氏は、私にかういふ面白い事實を話して呉れた。始め春木に分工場を設置するといふ事が確定した時、春木は本社からは鬼門に當るから惡いといふ說が出て、反對した者があつた、併しながら社長の寺田さんは、勢力家でもあり、自信も强く、一度決した事は邪が非でも斷行せねば措かぬ人である。隨て鬼門などゝいふ御幣を擔ぐ人でもなければ、そんな事に耳を傾ける人でもない。無論工事はドシ〳〵進捗して竣工した。

然るに、圖らずも今回の如き大火災を起し、莫大な損害を蒙るに

最も注意すべき出火の場所

至つたのは、迷信かは知らないが、何か其處に面白からぬ理由があるのではないかと思ふといふのである。

此火災に於て注意すべきは、出火の場所たる本館北手の假小屋である。此假小屋は本館から北稍東に觸れた方位にあつて、本館を中心とすれば。全く丑である。即ち此火災は工場の建物から言つても出火すべき部位から出火したので、本社と分工場との對向が火災系であると同時に分工場それ自身も亦火災系であるのは、頗る研究に値するのである。

即ち岸和田紡績の火災は、私のいふ火災系から出火したものだといふ事が證明された。

六　三井物産神戸支店の火災

此三井物産會社神戸支店の、大正二年八月三日の火災も、亦私のいふ火災系統から出火したもので、八月四日の『大阪朝日新聞』は左の如く報じて居る。

●三井物産神戸支店の火災

三日午前四時神戸海岸通三丁目なる三井物産會社神戸支店の三階表西隅電話交換室より發火し本館二階三階の全部及び階下の一部を燒き同六時鎮火せり

△出火の發見　四時頃前記三階表西隅室の窓より盛に火焔を吐き出し居たるを附近人力車帳場の輓夫が發見し斯くと裏手の小使室に告げ知らしたれば當夜宿直の事務員萩野義一並に小使吉岡幸助、岡崎英五と給仕の五名は喫驚して

本館に騙け附けたるも此際既に三階は大半燒失し二階も煙一杯となり居りて如何ともする事能はざりき

△發火の原因　電話交換室には晝間五名の交換手が勤め居れるも午後五時には事務員等の退社すると同時に一同歸宅するの例にて當日も五時となるや何れも同室を閉して退社し宿直事務員萩野は同夜十一時各室を見廻り午前一時頃寢に就きたるに其頃までは何等異狀なかりしとの事にて或は漏電にあらざるかともいへり

△損害約四萬　同支店は工費約七萬圓（間口八間奥行十一間にて）洋風三階建を以て去る三十一年三月新築竣工したるものにて本館は明治、東京、横濱、日本、共同の五火災保險會社へ三萬三千圓に什器は明治火災へ三千圓の各保險に附しあるが實際の損害高は四萬圓内外なるべし、右につき事務所を取敢ず元居留地三井物産船舶部へ移轉せり

此出火の部位は、三階表の西隅とあるけれども、西に隅のある理由がない、そこで私は此記事により、神戸みかどホテルの主人後藤氏に就て研究した。

後藤氏は、此燒けた三井物産支店の隣の後藤旅館の持主で、此出火を知るや、第一に駈付けた一人であるが、慥に表三階の西南、即ち未の方面から燒出したのを目擊したと語られた。又別に私が取調べた處に據つても、それに相違ない。三井物産神戸支店の出火も、亦火災系統を事實に證明したのである。

七　名古屋田中織物工場の火災

大正二年三月十日の名古屋の『新愛知』は、一讀寒毛卓立を禁ずる能はざる、左の如き悲慘なる火災記事を載せて居る。（長文なれば處々

を省略す）

●工女二十一人の燒死

昨曉午前一時頃市内の火見櫓に點々と鳴り渡りたる半鐘は、東區新出來町陸軍共同墓地下に當れる西春日井郡六鄕村大字矢田二百四十九番戸眞岡木綿織工場田中太吉方の出火を報じたるものにして、火は漸やく同家工場と二棟を全燒せしに過ざりしも、この火災に際して同家の工女等二十一名は無慘の燒死を遂げ近頃稀の悲慘事を出來せり、燒失せる田中工場は矢田區にても最も南盡れの田圃に接近して間口四間奥行十八間東向平屋建の工場と、其の東に間口六間奥行五間半の二階建南向住宅と外に東の端に炊事場とを有し、工場には八十一臺の織機を据付け電氣機械にて運轉せしめ近頃は夜業を廢して午前六時より午後六時まで男工七名、女工二十一名合せて二十八名の工男女を使役して日々眞岡本綿の織出しに從ひ主人田中太吉、妻はや、太吉の弟義次の三名が之が監督をなし居たり、一昨夜も午後六時に仕事を終り例の如く午後十時頃工女全部は寄

宿舍なる主家の二階十疊と八疊の二室に、主人夫婦と弟義次は階下奥方の寢室に、其他の男工七名は階下の男工寄宿舍と定められたる一室に就れも枕を並べて晝間の勞れに一同前後正体なく夢路を辿る折柄、午前一時五十分といふに同家の炊事係村上重五郎が出火を發見し火事よ〳〵と喚き立てし聲に一同夢を破られて爰に大騷ぎが沸き上れり、火は前記機械場の東の隅より出で折柄旱天續きの事とて瞬く間に工場を始め主屋全部、炊事場等を烏有に歸せしめたるが重五郎が火事よ〳〵と喚き立てし頃は時既に遲く火は紅蓮の舌凄まじく工場を甜め盡し將に主屋に燃移らんとする折柄にして、寄宿舍に枕を並べて臥し居たる工女達は二十一を年頭の若い盛りとて何れも晝間の勞れにぐつすり寢込みし處を魂消ましく火事よ〳〵と起され不意の變事に只うろ〳〵悲鳴を揚げて戸惑ひする中に火は工場より容赦なく主屋に燃ひ移り裏表の二方口に階子段を設けありしも兩方の階下は既に火原となり渦卷き揚がる焰と黑煙とに遮ぎられ更に窓口より脱れんとすれば爰には頑丈なる鐵柵がはまりて纖弱き女の腕にては到

底如何ともす可らず、柱の倒れる音、機械の落つる物音は慘として魂を奪ふ光景に纖弱き工女等は最早や逃げ場を失なひ刻々に逼り來る危險の運命の中に泣きつ喚きつ相擁して悲鳴を揚げ救ひを求むる聲は、現世からなる焦熱地獄を想像せしめたれど奈何せん階下は既に一面の火原と化し誰れ飛込んで救ひ出さんと言ふ者もなく主人太吉、男工等を始め附近の人々も只あれよ〳〵と手に汗を握るのみ、何と詮方無かりしは是非もなし。兎角する間に惡魔の毒舌と暴れ狂ふ火焔は遂に寄宿舍を押包み全部を焼き拂ふと共に、憐れむべし工女を救ひにとて昇り行きたる主人太吉の妻はやが三十歳を一期として焼死を遂げたる外、就寢中の工女等は一名も殘さず二十名が悉く咽びつ悲しみつゝ黑焦となり焼死を遂げたり、警鐘を聽いて同郡清水町の公設消防夫等が駈け附けたるを眞先に附近村落並に市部の消防組等續々駈け附け消防に盡力したれど稍や手遲れなりしと水利不便のため前記各建物を全焼せしめ餘焔北隣なる製糸場産進舍の物置小屋を半焼せしめて漸やく消し止たるが家人の云ふ所に依れば機械場は既に仕事を終ひたる後の事とて些の火氣もなく全く出火の原因は不明なりと云ふ一説には階下の男工が洋燈を墜落せしとも言へど其すら確かならず機械、織機其他の損害は一萬二千圓を計上したるが是等は横濱、共同、豐國の三火災保險會社へ七千四百圓の保險に附しありしと云ふ

東向きの工場と南向の住宅

此悲慘なる火災も、私の火災系からの出火と斷定することが出來る。此記事に據ると、田中工場は、間口四間奥行十八間の機械工場と、間口六間奥行五間半の二階建住宅と、さうして炊事場との三棟より成つて居る。

此機械工場が東向に建築せられ、住宅が南向に建築せられて居るといふ事實が、頗る研究を要する點である。此記事には、機械工場の東に住宅があるやうに書いてあるのみであるが私は機械工場が奥行十八間といふ長い建物である事實から推して、住宅は工場の東稍

長と乾の關係で共に火災系

北に觸れて南向に建築せられて居るものと信ずる、即ち住宅と工場との對向は起點と起點の對向であつて、丑寅と未申との方位の關係を生じ、住宅も工場も共に火災系となるのである。

殊に注意すべきは、出火の場所で工場の東の隅よりとあるけれど東に隅はない。奥行十八間間口四間の東向工場に、東の隅がある譯がないのである、即ち工場の北東の隅から出火して、接近せる二階建の住宅に移つたものとせねばならぬ。私は其他の新聞に據つて調べた結果斯く斷じ、此火災も即ち私のいふ出火部位から出火したものとしたのである。名古屋方面の讀者にして此火災に就て詳細を知れる人あらば、希くば報告を煩したいのである。

八　大阪瓦斯會社岩崎工場の火災

大正二年十月二十七日の大阪瓦斯會社岩崎工場の出火も、亦火災系からの出火たる事を語つて居る。左に二十八日の『大阪毎日新聞』の記事を轉載する。（長文なれば處々を省畧す）

●瓦斯會社工場燒く

二十七日午前九時十分市内西區岩崎町大阪瓦斯株式會社工場なる岩崎工場副産物製造部第三號コールター蒸溜竈より突然發火し忽ち猛然として燃え上り一面の大火となりて黑灰色の煙濛々半天を覆ひ工場内及び附近一時に大騷となりたるが遂に、コールター蒸溜竈一棟（約五十坪）ナフタリン精製場一棟（約五十坪）コールター置場一棟、押揚場、輕油貯藏場其他空地に積堆せる幾多の材料を燒失し漸く同十一時頃鎭火するを得たり、原因に就き目下九條署にて係職工なる

府下北河内郡南郷村大字新田北口八三吉山本三代太郎國見金市の三名を取調べ中にて尚ほ審らかならざるも當日午前七時頃輕油を取りたるコールターの糟を取り出し更に新しきコールターを竈内に送り輕油を製造中蒸溜管に故障ありて管内閉塞したるものと見ゐ輕油は一時流れ出でず俄に火となつて迸出せしため之が輕油に燃ゐ移りしものにて多分管内の瓦斯が發火せるものならんといふなほ損害額に就て同會社の語る所によれば甚だ大ならざるやう云ひ居れるも其節の調査に依れば今後の設備費等を合して約十萬圓の損害は免れざるべしと云へり、出火等の塲合における危險の程度殆ど火藥庫にも類する瓦斯タンクを市内而かも新市街の近時非常の發展を示しつゝある人家稠密の塲所に置くは危險の甚だしきものなりとて從來より九條、市岡、岩崎、三軒家、泉尾方面の市民は之が移轉を唱へし事再三に止まらざるが今回の出火に於て九條署の警鐘けたゝましく亂打さるゝや附近住民の恐慌一方ならず『そりやこそ瓦斯會社じやタンクが危ない』と喚き立て前記各町は固より木津川を隔てたる對岸の幸町住民等まで築港又は上町天滿邊の知邊を頼りて氣早に避難するもの多く非常の大騒動を演じたり尚同會社の業務に從事せる職員、職工等が熾んなる火の手に膽を消しタンクの大破裂を氣遣ひて附近の自宅に逃げ歸り避難の準備を爲したる者多しとて附近の人々は此卑劣なる振舞に憤慨し居たり

恰も岸和田紡績と同じ對向

此岩崎町の工塲を中ノ島の本社から觀るに、火災系たる起點と起點の對向である。即ち工塲から本社は丑寅の正位に當り、本社から工塲は未申の正位に當る。恰も岸和田紡績の本社と分工塲との對向の如くである。

此起點と起點の對向は、獨り火災系なるのみならず、種々の問題を惹起するもので、大に不祥こせねばならぬ。將來、瓦斯會社と岩崎町民との間に面白からざる紛擾が起ることは、此對向關係に依て推することが出來る。

又此起點と起點の對向に就ては、特に一言せねばならぬことがあ

寺田片岡両氏共起點に分社

起點の發展に成功者が多い

る。

岸和田紡績の社長は勢力家の寺田甚與茂氏、大阪瓦斯の社長は名望家の片岡直輝氏で、共に大阪實業界の大立物である。此二人が一は紡績會社に成功し、一は瓦斯會社に成功して、然も分工場を共に起點たる丑寅と未申に構へて居るといふことは、頗る奇なる現象とせねばならぬ。

運命上最も不可思議なるは此起點の二方であつて、從來の見聞に徴するに、偉大なる成功者で却て丑寅と未申に向つて事業を發展させた人が頗る多い。殊に丑寅に土藏のある家は、一時は非常に盛になるもので、其成功の著大なるに時人を驚かせた例は尠くない。

現在大阪の實業界に於ける成功者の一人たる山口玄洞氏の如き、丑寅に三階建の土藏を建て、其盛大なる發展に驚嘆と羨望の的となつて居る。寺田氏も或は丑寅に土藏があるかも知れない。

一時は盛でも二代と續かぬ

將來の運命の何等かの表彰

併しながら不思議なことには、此起點たる丑寅に發展した人に、永久に家を續かせた人が少い。一時は非常に盛でも、二代とは容易に續くものでない。盛なることも早いが、衰へるのも亦頗る早いのである。

瓦斯會社の片岡氏も岸和田紡績の寺田氏も、共に起點に分社を構へ、火災に遭遇したのは將來の運命の何等かの表彰と見なければならぬ。私は此運命を研究すべき機會が到來したならば、重ねて論じたいと思ふ。

九　阪堺電車事務所の火災

大正二年十二月五日に阪堺電車の舊事務所が燒けた。私は其出火

點を取調べてみたが左の『大阪朝日新聞』の記事にもある通り、全く不明であつた。

●阪堺舊事務所の火事

五日午前二時十分南區惠美須町二丁目角屋敷の阪堺電氣軌道株式會社舊事務所木造建物の壁を這ふて火焔メラ〳〵と暗の中に立上つた、眞晝の樣に輝いた新世界の電燈も十二時を限りに寂しく消ゐて事務所の邊り人影一つ見ゐなかつたので先程から待合室の內部に黑煙が次第に渦卷いて來るのを誰れも氣附かなかつた、昨今同會社の事務はこの木造の建物を少し隔てた赤煉瓦造りの建物の方へ引移つてゐたので火の附いてゐる建物には人の氣なく火の手は階上に思ふが儘にその猛威を逞ましうして了つた、やがて最寄りの人々が怪しい物音に驚いて驅け附けた時には毒々しい黑煙と赤々とした焰に建物はすつかり包まれてゐた、難波、南其他からの消防署でも必死になつて消止にかゝつたが早や如何するとも出來なかつた火が建物全部一棟百三十八坪を燒拂つて漸くに鎭火したのは午前六時可成り長い時間といふもの場所柄のことゝて火事場が凄じい雜沓と混亂を極めたこといふまでもない、難波署では出火の原因に就いて關係者を取調べてゐる、同待合室には天王寺玉水通の福田安造が賣店を出してゐる、この賣店は午後十時限り店を閉めるのであるが或は火の氣が茲に殘つてゐて大事に至つたものではあるまいかともいふが會社では取り敢へず燒けた場所から數間の南手に臨時昇降場を設けて電車の運轉を遣つてゐる

元來此事務所は頗る不調和な建物で、門だか待合室だか分らぬ廣告的建物があつて、本社は其南に建てられて居る。發火は事務所ともいひ賣店だともいふが、共に同一の建物なのである。

其中心は何れかといへば、勿論本社で、本社と賣店との關係は南北の關係であるけれども、敷地の方位が頗る不正確であつて、到底

中心を定むるを得なかつた。隨て十分に斷定を下すことは出來ないが、一見した處では、出火の部位は、本社から見て未申の一隅であつた事は殆ど疑ひない。

十　大倉組大阪支店の火災

大正二年十二月十三日の大倉組大阪支店の火災も亦私のいふ出火系統から出火して居る。

●大倉組支店燒く

十日午前六時頃東區釣鐘町二丁目一二八番地合名會社大倉組大阪支店階上西南隅なる庶務室より出火したるが階下に宿直し居たる給仕小使連が物音に目を覺し駈上りたる頃には既に猛火は室内に漲り居たるにも拘らず狼狽の餘り消火器バケツ等を持出し姑息なる手段を講じ居る内火の手は容赦なく八方に擴がり最早絶命となりて始めて東消防署へ急を告げたるにぞ茲に各消防隊の出動となりしが幸にして微風だもなかりしかば二階の屋根を燒き拔きたるのみにて八時半全く鎮火したり同店小使某がバケツを提げたる儘階段より轉げ落ち打撲傷を負ひたる外さしたる負傷者なかりしも何分上町目貫の松屋町通を控へたる事とて附近は一時は非常の混雜を呈したり原因損害高等目下東署にて取調中

原因は暖爐の火始末が悪かつた爲だらうと聞いたが、兎に角右に掲げた「大阪時事新報」の記事にもある如く、西南隅から出火したもので、三井物産神戸支店と同じく、私のいふ出火系の部位なることを證明するまでもないのである。

十一　大阪回生病院の火災

此處まで書いて來た時、突如、警鐘耳朶を衝いて起つた。時は大

不祥の地相なのではないか

正二年十二月十九日の午後十一時頃で、回生病院が燒けて居るといふ。院長の菊池博士とは心易くして居る私は直に駈附けて見たが、到底近寄る事が出來ぬ。若しや火災系といふ不祥の地相なのではないかと心配しつゝ歸宅した。

翌日の『大阪毎日新聞』は左の如く報じた。（處々省略）

●回生病院燒く

市内北區絹笠町回生病院（院長醫學博士菊池當三郎氏）は目下内科（東館）患者二十五名、小兒科二十五名、外科（西館）三十二名都合八十二名の收容患者あり、同院は曾て明治四十二年の北區大火の際類燒以來殊に火の元用心に注意をなし萇盆の火にすら心を配り居たるが昨十九日午後十時十五分頃同院東館の地下室なる自家用電燈の發電機關部より出火して遂に同館全部を烏有に歸したり是れより先前記時刻に同院看護婦が同機關部より白煙濛々と立昇り居れるを發見し

て騒ぎ出すと間もなく院内の電燈全部が消滅せるより醫員が急ぎ同室に立ち入り見たるにコハ如何に室内は一面火焔を以て滿され渦を卷いて煙を吐き出せる凄じき光景に直ちに院内に急を傳へたれば宿直員を始め居合せたる人々急遽地下室に駈けつけ消火せんとせしも此時は既に猛火は炎々として一面に漲り居たる事とて如何ともする能はず火は須臾にして上層なる地上室（同院は三階建にして地下室を有せり）に燃え上りたれば今は是迄なりと醫員看護婦は時を移さず各病室に急を報じ一同力を盡して患者を戸外に運び出したるが同時に火は早くも同館の外部に洩れて紅の舌を飜したれば附近の人々はソレ火事よと云ふ間もなく市内各所の警鐘は激しく鳴り渡り同時に所轄北警察署員及び消防隊、各署の消防隊等續々駈けつけ大阪砲兵工廠村岡少將も直ちに現場に駈けつけたるが此時東隣の大阪控訴院の大建物は危險と見ゐたるより同少將は直ちに急を第四師團に報じ即時に輜重兵第四大隊全部が隊伍整々出動一方大阪衛戍病院よりも援助隊を繰出して回生病院醫員等と力を協せ擔架を以て患者を取あへず附近なる大阪ホテルに避難せしめたり然るに一方火の手は稍強き西北風に煽り

立てられて瞬く間に火焔は三階建の同館全部を包みて狂ひに狂ひ遂に東隣なる大阪控訴院の塀に燃ゐつき嗟や同院も危殆に瀕したるが各署消防手及び加藤中尉指揮の下に活動せる軍隊は專ら病院下なる堂嶋川の河水を利用し數臺の蒸汽ポンプを以て瀧の如く水を注ぎかけて辛くも焔の波を喰ひとめたるが何分建築物の宏壯なるため一時は火先擴大せんとせしも遂に東館を燒落したるまでにて翌午前零時過漸ゝ鎭火せり

回生病院は總建坪四百坪の洋風木造三階立てにして今回にて都合三回の火災に遇ひ今回の建築は明治四十二年七月北區大火に類燒後再築に着手し四十二年十二月落成せしものなり損害高は約二十萬圓ならんとのことなり

出火の原因に就ては目下其筋にて取調中なるが右は電氣機關部に故障を生じモーターより發火せるものならんと

翌朝私の駈附けた頃には、最早秩序整然として、通行も自由に出

火災系でない乾と巽は半燒

來、院長を始め看護婦に至るまで、患者への手當、見舞客への應接など遺憾なきものであつた。

そこで私は、燒跡を具に視察したが、先づ驚いたのは、火災系でない戊亥の一隅と辰巳の一隅とが半燒で、即ち此二隅から出火したものでない事を明かに語つてゐることである。而して火災系たる未申の一隅も亦燒殘つてゐる。

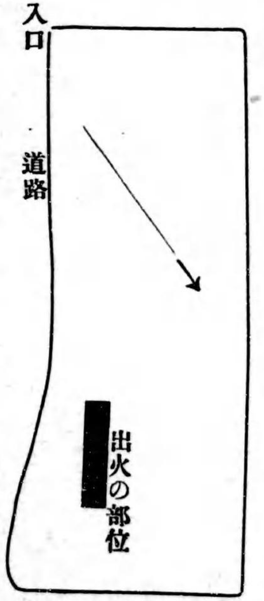
してみると出火の場所は、東か、若しくは東北の何れかといふ事になる。そこで東の道路に沿ふて親しく實見するに、最も甚しく燒跡を印して居るのは、中央から東、及び東北に當る、即ち私のいふ起點である。

茲に於て、回生病院の地相と建物との中心を定める必要がある。病院は二棟から成つて居て、待合室、事務室、藥局、內科診察室、外科診察室とが本館となり、小兒科、耳鼻科の診察室が又一棟とな

回生病院は南北對向の建築

り、二階三階は皆病室である。故に表から見れば棟は一つなれど、内科診察室の北方に空地があるから二棟になるので、中心は本館に定め、北の一棟は附屬と見ねばならぬ。此觀察から斷定すると、回生病院は南北の對向に建築せられて居る。

次に地相は如何といふに先づ道路から本館の中央部に磁器を据へて見ると、南稍西に觸れてゐる。それから裏へ廻つて觀ると、地相は正しく火災系で、即ち未申に向つて居る。之を略圖に示すと



地相は不幸にして火災系だ

右の如く、丑寅に張つて未申に向つた趣きがある。それは病院の東北の一隅から觀察すれば一目瞭然である。是等の理由よりして、回生病院の地相は不幸にして火災系であるといふ斷定を下さねばならぬ。

然らば出火の部位は何れか。本館の中央より觀るも、地相の中心より察するも、中央部の北から東に觸れた地下室であつて、即ち火災系からの出火である。

又燒跡を見ても、地下室の中央部から北と東に燒けて、西と戌亥には燒けて居ない。而して南に燒けず、又南西にも燒けて居ない。是で見ても、出火の部位が、地相並に建物の中央部から北東に當る起點にあるとの斷定は容易である。

殊に院長菊池博士の住宅（假宅ながら）と病院とが是亦起點と起點

院長邸と病院も起點の對向

福原消防課長の意見も同一

の對向であることは、よく〳〵免れられぬ表彰である

其日、大阪府廳の近所へ行つた序に、警察部消防課長の福原警視を訪うて、回生病院の出火部位に就て卑見を述べた處が、同氏の意見も、私の斷定と符節を合する如く一致して居つた。即ち私の火災系と出火部位の存在を證して餘あるものであつた。

前にも言つた如く、菊池院長とは交遊もあり、直に再築に着手せらるゝといふことであるから、是非火災系を避くるやう、卑見を述べて參考に供したいと思ふ。

十二　東京增上寺の火災

燒けぬ淺草寺燒ける增上寺

東京で淺草寺は燒けぬが增上寺はよく燒けると云ふことを聞いたが、何故に增上寺は燒けて淺草寺は燒けぬか。此比較研究も亦防火

上頗る參考とすべきものであらう。

宮城を中心として火災系を見るに、增上寺も火災系なれば淺草寺亦火災系である。然し之は大火災の場合であるから論外として、寺院としての火災系を研究するに、頗る面白い事實がある。

增上寺を俗に逆庫裡の構へと云ふ。逆庫裡とは、寺院は大抵南面か東面に建てられて居る。南面に建られる場合には、本堂が西にあつて庫裡が東にある、即ち向つて右に庫裡、左に本堂と云ふのが寺院普通の構である。

然るに增上寺は南面して庫裡が西にある。即ち山門より見ると本堂が右に有つて庫裡が左にあり、寺院普通の建方にあらざるが故に之を逆庫裡と名付けたのである。

此逆庫裡の構の大抵が私の火災系となるといふのは、誠に不思議

逆庫裡の構へは大抵火災系

逆庫裡の悪いのは此點から

と言はねばならぬ。今增上寺の例に依ると、增上寺は正確なる南面の構へで、山門と舊本堂とは直徑凡百五十間を隔てゝ居る。然して庫裡は恰も山門と本堂との中間に建築せられてゐる

此本堂と庫裡と山門と三者の方位の對向關係を觀るに、山門から本堂を觀れば正北に當り、庫裡を觀れば戌亥に當る。又庫裡から本堂を觀れば私の陽の起點なる丑寅に當り、山門を觀れば辰巳となる然して本堂より庫裡を觀れば即ち陰の起點たる未申となるのである。

即ち增上寺の構へは本堂と庫裡とが起點と起點の對向となり、立派な火災系である。即ち逆庫裡の構へは、其構へ方に依れば斯の如きの結果を生じ、啻に火災系たるのみならず、不祥の出來事の生ずるものである、俗に言ふ逆庫裡は悪いとは之を實驗から得た結果だと思ふ。

燒ても立派に再建が出來る

私の定盤から云ふと、辰巳に山門があり戌亥に庫裡のあるのは頗るよい。即ち活動位の山門と、財產位の庫裡とは誠に始あり終ある構へで、增上寺の盛なりし事は此構えに見るも想像することが出來る、燒けても立派に再建の出來るのは、此山門と庫裡との對向に表彰せられて居ると言ふてもよい。

私が警視廳に消防課長室田警視を訪問して、增上寺の燒けた原因と、其出火の部位を尋ねると、本堂の裏には、德川の盛時、萬代火災に罹らぬ樣にと堅固に建てた寶庫があつた。然るに增上寺の坊主が、寶物や黑大師を拜觀させて觀覽料を取るに便宜のよい樣にと、獨立に建てあつた黑大師や寶庫に掛橋をした。

橋が出來たから雨天の折にも便利よく、交通は自由になつたが、

便利はよいが乞食其の寢床

其掛橋の下を良い宿が出來たと云ふ壚梅で乞食共が毎晩の寢床とした。其結果乞食の火仕舞の惡るかつた處から火災を起して、本堂も黑大師も烏有に歸するの不幸を生じたのである。若しも坊主に寶物で錢を取ると云ふ慾念が無ければ此掛橋は出來ない。從つて火災も起らなんだのであると語られた。

寶物で錢を取ると云ふ慾念

私は室田警視の談話を聽いて非常に感じたことがある。夫は何であるか。信仰の墮落と感情の激變が火災を起す原因となることが屢々あるといふ事である。殊に寺院の出火には最も其原因が多い樣である。

感情の激變から火災の激增

感情の激變から火災を起す例を求めると、東京市の如き最も其著しいもので、燒打事件などが起つて人心の激昂したときに、火災の頻々として所々に起るは事實の明に證明するところである。彼の桂公が最後の總理大臣に任命せられた當時、即ち憲政擁護、閥族打破の燒打事件當時、放火、失火等の火災事件が一ケ月二百五十件以上も有つたと云ふ例に見るも明かである。

戰爭中は男子の出産が多い

すべて社會の出來事は時の人心傾向に伴ふもので、日露の役に男子の出産が非常に多かつたと云ふ實例の如きも、國民の公憤が戰勝に激動せられ、有爲なる兵士を得んとする人心傾向が、閨門にまで感寫せられて、自然男子の出産を多からしめたのである、要するに社會は人心の感情作用に依りて種々なる盛衰興亡の歷史を印するものと言はねばならぬ。

慈雲會者が、天地此人に依つて倍增し、國家此人心に依つて成立すと仰せられたは實に千古不磨の名言である。

增上寺の火災の如き、其原因は無論私の火災系に關係するや勿論

火災系と僧侶の信仰の墮落

である。然れども信仰の墮落、即ち僧の感情傾向が信念を去つて、金錢本位に寶物とか黑大師を見世物にしたと云ふ激變が火災の因を爲し、乞食に動機を與へたと見るが適當である。

火災を惧れた嚴重なる建築

何故なれば、德川家が寶庫を築造したる時代には、其寶庫を萬代不易に相續せしめんと云ふ信念の上から、同族にも容易に開閉を許さゞる程に嚴重に築造せられたものである。從つて火災を第一に恐れ、四邊に何等の建物をも許さず、一點火氣を喚ばざるところに非常の注意が拂ふてあつたのである。

然るに、時代の傾向が斯の如き信念を破り、十錢とか五錢とかの見世物となし、利益の多からんことを欲する感情が一轉再轉して、毎日自由に開く、不便だから橋を架けると云ふ天地月鼈の激變を生じた。其結果欲望を代表する橋下に火災の因を爲したのである。

一山寶庫相續の信念を謬る

即ち僧侶が、寶庫や黑大師を、始め築造せられた信念の上に相續せずして、利慾の上に相續せんと爲したる信念の墮落が、此火災の原因を作つたものと斷言せねばならぬ。增上寺一山の信念が寶庫と黑大師を去つて本堂をも燒失するの不幸を生じたのである。

此信仰の激變と火災系が一致して增上寺は良く燒けると云ふ批評を生ずるに至つたのである。

淺草寺は何故に燒けないか

然らば淺草寺は何故に燒けないか。淺草寺に參詣せられた人は承知かも知れないが、觀音大士の御堂が淺草寺である。さうして淺草寺には庫裡と云ふものが無く、觀音堂の一堂宇のみである。他の講堂庫裡の如き大建物は傳法院と云ふ一ケ寺で、要するに淺草寺と傳法院の二ケ寺が同一境內にあるのである。

淺草寺の建物は全く一堂宇の獨立したもので、四面四方全く平等、

寸毫も堂宇に障害を與へぬ

殊に四邊が空地となつて寸毫も堂宇を障害するものがない。從つて炊事もしなければ、火氣を取扱ふのは佛前の燈明か、線香位のものである。

信仰關係から言ふと、觀音薩埵は衆生濟度を過去、現在、未來の三世に垂れ給ふので、彼の堂宇も要するに衆生濟度を目的として建立せられたものである。故に朝夕暮夜參詣の善男善女を絶たざるは、堂宇建立の目的と相應するもので、建立以來の信仰今尚衰へず、年に月に向上せられて變遷がない。即ち信仰に建立せられ、信仰に相續せられて昔の儘である。即ち火災を起すべき信仰上の原因が無いのである。芝增上寺が寶庫を見世物にする信念の激變とは同一に論ずべきでない。

殊に淺草寺は寺より信仰を勸誘するにあらずして、全く衆人自然

燒ける理由と燒けない理由

の信仰である。若しも淺草寺の僧が雨天に便利だからといつて、四邊の空間に廻廊を設けるとか、又は觀音薩埵を見世物にする等の墮落の一念生じて、之が形に表彰されんか、何等か不祥の動機を與ふるに相違ない。假令火災は起さずとも不祥の出來事を生ずるは、因果自然の感應の道理、炳として欺くことは出來ぬ。私は淺草寺が空地に超然として獨立し、唯衆人の信仰に任せ、僧侶が昔日の法式に從順して相續してゐるのが、不祥事の出來ない表彰だと信じて居る。即ち增上寺の燒ける理由と、淺草寺の燒けぬ理由も、亦此信念の變と不變にあると信ずるのである。

信念の墮落が火災を起すの動機となる例を尙二三擧げてみやう。

十三　能登總持寺の火災

總持寺の火災も信仰の墮落

北日本能登半島に禪宗の大本山總持寺と云ふ寺がある。開山は瑩山禪師と云ふて、明治天皇より常濟大師の號を賜ふた程の高僧で、越前の永平寺と共に曹洞宗の大本山である。曹洞宗は吾日本帝國の本山中で一番澤山な末寺があるので、壹萬參千ケ寺もある。此壹萬參千ケ寺は畢竟ずるに常濟大師の法源のみで、斯の如く今日まで盛大に發達したのである。實に大師の法績の餘慶と言はねばならぬ。

此總持寺の燒けたのが增上寺の火災と其原因を同じうして、矢張信仰の墮落、感情の激變と見ることが出來る。

總持寺は增上寺の如く都市にあるのではないから、觀覽料を取つて佛樣を見世物にするとか、寶物の展覽をして寺收の足にするとか云ふ寺ではない。殊に大本山でもあるし、又收入も澤山にあるから、財政上は安樂で、偏に禪僧修行の道場である。

怪傑石川素童師の勢力範圍

曹洞宗か騷動宗かとの評判

靈跡に汚點を印した素童師

然るに總持寺は怪傑と言はるゝ石川素童禪師の勢力範圍の寺であつて、同寺の事は一に石川師の自由自在である。爲めに大なる野心を抱いて永平寺との分離を企て、人をして騷動宗と言はしむるに至つたことは、世人の今尙記臆に存することころであらう。

此分離騷動の激烈なりしことは、獨り一宗を騷したるみならず、遂に內務大臣をして干涉せしむるの止むを得ざるに至つた。然して石川師は其目的を達するを得ずして、又以前の如く永平寺と共に二本山制度の木阿彌となつたのであるが、風なきに浪を起して、瑩山國師の靈蹟に一大汚點を印し、且つ僧侶としての信念に一大缺點ある事を曝露した。

私は此石川素童師が分離を企てゝ一宗の僧侶の信念に疑惑を生ぜしめ、感情を激動せしめたのが因を爲して、終に總持寺の全伽藍を

讀經鉦で不淨物を煮て夜食

灰燼に歸せしめたものと信じて居る。即ち常濟大師の清淨精舍が名利、權謀の策源地となりて信念の上に建立せられた感應を滅却した當然の結果だと深く信じて疑はない。

其證據は發火の原因を以て之を察することが出來る。聽くところに依れば、雲水僧が毎晩本堂の裏で讀經鉦で不淨なる物を煮ては夜食する。始めは火仕舞に注意してゐても、馴るゝに從ふて亂雜になる。終に五百年の精舍は此墮落僧の爲めに灰燼となつたのである。

總持寺が分離の爲めに費消した金は非常の多額だと云ふ。殊に一山の僧が石川師の爪牙となりて修業を棚に擧げ、分離運動に狂奔した結果、山内は亂れに紊れて、監院職と云ふ總取締の人さへ不在であつたと云ふ。

寂として梵音微かなる參禪打坐の僧舍が、其信念と修行の境界を

火災は此一念に因を作つた

失ふて、分離だとか越本山が惡いとか、俗の俗すら尙行はざる權謀術數を弄したのは誠に、信仰の墮落と同時に感情の激變である。五百年の空寂を破つて修羅の街と化せしめた、此一念に失火の因を造り、墮落僧其動機を與へたものである。感應の理や誠に恐れても悞れねばならぬ。

私は總持寺の火災も亦私の火災系から出火したものと斷ずるも、尙取調べる必要があるから、或機會に於て確論したいと思ふ。

十四　播州新清水寺の炎上

大正二年八月二日、山林の火事に依り播州新清水寺が灰燼に歸したのも、亦住僧が信仰の墮落と、感情の激變に原因して、此の不幸を招いたものと斷することが出來る。

新清水寺も聞くこころに依れば、山林拂下に信徒こ住職の間に三年に渉つて紛擾をなし、斯間に非常なる惡辣の手段行はれ、或者の爲めに刑事の被告人さへ生じたこのことである。

すべて僧侶は信念の上に立脚して居ることは申す迄もない。然も自己慾望の爲めに信念をも犧牲にし、寺院をも犧牲にして利を爭ふが如きは、實に寺院の建立せられたる根本を滅却するもので、誠に寒心せねばならぬ。殊に新清水寺の如き古刹にして、觀音大士の靈場たるに於て一層のことである。新清水寺が山林に原因する紛擾を生じ、然も山林より出火して堂塔伽藍の偉觀を烏有に歸せしめたる因果の感應に驚かざるを得ぬ。『大阪朝日新聞』には左の如く掲載せられて居る。

●新清水寺の炎上

二日午後五時西國二十五番の清水寺山林より失火し目下熾に燃ゆ本堂危し

△遂に炎上　清水寺の火事益々猛烈にて火焔山を包みて近寄るを得ず風いよいよ狂ひて山谷鳴動し物凄き事云ふばかりもなし本堂、大講堂、藥師堂その他堂宇悉く炎上し寶物も燒失したり立木の損害亦莫大なり鎭火の見込み立たず

△山麓の民家危し　同山は面積千餘町歩、價二百萬圓と稱せられたる山林にて三四年前より伐採にかゝりその六分通を切り出したりとは云へ損害また莫大なり十一時猶鎭火せず山麓の民家に延燒の虞あり

△清水寺は加東郡鴨川村御嶽山（一に天神山）にあり西國三十三所二十五番の札所にして本尊は千手觀世音菩薩なり俗に新清水寺と云ふ法道仙人の開基にして寶治年中光善上人中興す維新前には寺祿六十石の御朱印寺なりき同寺は昨年五月九日午後三時にも山火事の餘炎境内に及び仁王門、庫裡等を類燒し本堂ま

た危かりし事ありしが今回は堂宇悉く燒失したるなり、同寺の常行堂、三昧堂は後白河院の建立、藥師堂は池禪尼の建立、阿彌陀堂は右大將頼朝の建立、二層塔婆は祇園女御の建立として殊に名高きものなり

私は此出火が必ず私の兩起點か又は正北にありと信じて居る。此火災と紛擾に就て讀者諸君の中に詳細を知る人あらば、報告を得て批評を加へたいと思ふ、希くば通信を乞ふ。

私は以上の事實と經驗とに依つて、火災に一定の系統ありといふ結論は　決して無謀なものではないと思ふ。更に歩を進め火災には何故に系統があるかといふ理論を述べ、併せて防火の方法に論及したい。

十五　火災と起點の關係

雪は何故に夏に降らないか

總て一切の事物は、必ず系統に依て進歩もし退歩もする。例へば傳染病を研究するにも、先づ其系統を調べ、遺傳したとか、傳染したとかの關係を明かにした上でなければ、治療の方法を講ずることは出來ない。

胃病を病むには、必ず病むべき原因と徑路がある。此原因が一定の徑路を辿つて、身体の局所を襲ふて、始めて何病だといふ斷定が下し得られる。若し病氣の原因、系統を究めずして治療せんとする醫者があれば、それは醫者たるの資格の全く缺けた人である。炭礦でも金礦でも、先づ其礦脈を精査し、それに依て更に系統的に地脈を調べて、始めて其有無や礦質を斷定し得るのである。

又、冬には雪が降り、春には櫻が咲くといふことは、之は系統的に言はれる事であつて、毎年々々夏に雪は降らず、秋に櫻の咲かな

家相方位は系統を教ふる物

いのは、氣候に一定の系統があるからである。雪は冬に降らなければならない原因があり、櫻は春に咲かなければならない徑路があるこの氣候の系統的な表現に依て、雪は冬に降り、櫻は春に咲くこいふ斷定が一定不易のものとなるのである。

是等の例に據ても、一切の事物には必ず系統があるこいふことが分る。

從來の家相方位なるものは、自然の事物に一の系統のあることを教ふる古人の老婆心切から來たものだと私は信ずる者である。

隨つて家相も方位も、系統を尙ぶこいふことが第一の必要條件だと思ふ。

例へば、家相を論ずるにも、方位を說くにも、先づ陰陽の兩儀を根本として居る。其陰陽の兩儀を根本とするのが、即ち物に系統の存することを示さんとしたもので、陰陽の兩儀に一定不變の眞理があつて活動するこいふのは、必ず陰陽兩儀の循環に依つて、事物は新陳代謝するが故に、一切の事物は、陰陽兩儀の系統を放るゝものでないと教ふるのである。

宇宙には斯の如く系統あり

隨て陰陽兩儀の兩系統より五行を生じ、其五行の循環する所に相生相尅を明し、吉凶禍福を論じて、九星とか八卦とか七曜とか、種々なる說が生ずるに到つたのである。

之を實例に明かにすると、九星の定盤なるものは、五黃を中央とし、九紫を南極に配し、一白を北極に配し、東に三碧、西に七赤、丑寅に八白、辰巳に四綠、未申に二黑、戌亥に六白を配して、宇宙の眞理には、斯くの如く系統のあるものだと敎へて居る。若しも定盤を說かない時には、四方四維は無茶苦茶になつてしまひ、東西南

火災の系統とは抑も何れぞ

北も無視した結果になつてしまふ。

即ち一切の事物には系統があるといふ事實を證明し、其循環を明かすのが、九星の因て生じた所以であるが、是等の詳細なる理論は追々に論ずることゝして、今は唯、陰陽兩儀も、九星五行も、要するに一切の事物には系統があるが故に、住宅の運命にも亦系統があるといふ立脚點だけを明かにするに止めて置く。

茲に於て火災にも一の系統の存する事は必然の結論であつて、私は前述の事實に依て。

出火の系統は、正北より正東の間と、正南より正西の間にあり

と斷言することが出來る。即ち別掲の出火部位發見定盤に示すが如くである。

磁針が北を指すは萬古不易

南北兩極は方位上の主腦だ

方位上では北と南とが兩極となつて、此二極を斷定して始めて東西四維を斷定することが出來る。隨て、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、磁針が北を指すのは萬古不易である。是れ自然の眞理を表現したるものであるが故に、自然其の物は南北兩極に、循環活動の始終の眞理を表現して古今不易である。だから九星にも、北に一白の始を配し、南に九紫の終を置いて、此中間に三碧以下を配置して、南北の始終なることを明かにして居る。即ち南北兩極は方位上の主腦である。

南北兩極を陰陽に當てると、北は陽の始にして陰の終である。南は陰の始にして陽の終である。之を時間に當つれば、北は午後十二時にして、一日の終なると同時に、一日の午前の始である。南は正午にして、又午後の始である。午前の陽にして午後の陰なるは、別

一切の源は陰陽交叉にあり

段説明する必要はあるまいと思ふ。

私は此南北兩極、即ち陰陽の交叉する處に、運命の機微なる消息があるのだと思ふ。獨り火災系の源泉なるのみならず、人事と方位との運命連結は、實に此陰陽の交叉にありと斷言することが出來るのである。

此南北兩極の陰陽交叉して、北より右旋して東に循環するところが陽の起點である。是は時間で説明すると午前一時から三時の間である。これは方位は四方四維の八方なるが故に、二十四時間の八分の一といふ意味で、即ち北から右旋したる東北の方が午前一時から三時に當るのである。私は之を起點といふ。詳しくは定盤に示した通である。

此起點を十干十二支の配當からいふと、丑と寅と其正位とで、古

鬼門は價値なき牽強附會説

來之を鬼門と名づけて居る。

この鬼門といふのは、別に整然たる説明があるでもなく、固より學問上何等の價値もない牽強附會の説で、爲に識者の一笑を買ひ、愚者をして迷信に陷らしめた事が多い。

要するに鬼門といふのは、事實上、人事と方位の關係から不祥の出來事を生ずる結果、鬼といふ、人間以上の或者があるといふ觀念に依て此名稱が生じたので、畢竟、事實上の不祥事を恐れた結果なのである。

私は鬼門の説には服することは出來ないけれども、陽陰交叉の起點に、人事と方位の機微なる活動ある事は信じて疑はない者である。是れ明かに事實の證明する處で、到底否認を容さない。

私が丑寅の方位を起點と名づけたのは。陰陽交叉して、更に活動

何故に丑寅の方位は起點か

起點の活動が働て火を發す

となるが爲で、方位の活動は正に此部位に始つて、東に循環するのである。即ち丑寅は陽の活動の根源、換言すれば方位の活動の源泉であつて、更に之が人事と交叉して、種々なる出來事を發生せしむる。之を起點と名づけた所以である。

而して、火災は此起點の活動が建物に働いて火を發するに到る。つまり建物が起點たる部位に存在して、始めて運命上の活動を生ずるに到るのである。

丑寅と反對の未申、即ち午後一時から三時も、亦南極の陰陽交叉より進みて陰の活動となる。即ち陰の起點である。其活動は正しく丑寅と同一で、此兩者の對向に優劣はない。

古來、丑寅は鬼門として恐れられて居るけれども、未申に對しては、何等特種の名稱はなく、單に裏鬼門などゝ稱へて居るのみで、

何故に此兩起點は出火系か

隨て、人に依ては、未申は鬼門と同一の活動と見て居ない。

此鬼門とか、坤門とかいふ說に就ては、別に其妄談邪說なるを論ずる機會があらうから、詳細は其時に讓り、今は唯一言注意するに止めておく。

以上に依て、出火の部位が、南北兩極から陰陽の兩起點にあるといふことは、恐く讀者諸君の了解せられたことゝ信ずるが、是から更に一歩を進めて、何故に此兩極、兩起點から出火するものであるかと問ふ人があるならば、私は、それは自然の神秘、方位と人事の交渉の機微にして、人力にては到底これ以上の說明をすることは出來ないと答へるより外はない。恰も太陽が東から出て西に沈むといふ事實を、地動說以上に說明する事が出來ないと同樣である。

けれども、事實の證明する處に據て、兩極、兩起點が出火系であ

ると斷ずる事は充分に出來得るのである。

方位と人との交渉する處は、此兩起點を主人位と妻位以下に配置した家相部位發見定盤に於て詳しく說明して置いたから參照せられたい。

以上にて出火系の理論を盡したと思ふ。以下順序として、防火に就て詳述しよう。

十六　火災豫防論

以上に於て、出火に一定の系統あることを詳論し盡した。以下、如何にせば火災は豫防し得べきかに就て卑見を述べ本文を結ばうと思ふ。

火災を防ぐのに、火を出してから騷ぐのは拙の拙なるもので、火

火を出して騷ぐは拙中の拙

燒けぬ工風と火の出ぬ工風

を出さない――寧ろ火の出ない工夫をするのが第一である。即ち如何にせば火は出ないかといふことに工夫一番せねばならぬ。

然るに從來の火災豫防の研究といふものは、火の出ない工夫に非ずして、如何にせば燒けないかといふことにのみ工夫を凝らして居る傾きがある。即ち火災といふものは出るべき筈のものだといふ風に決めてしまつて、火が出てからの策ばかりに苦心して居る。例へば防火壁とか、消火器とか、又は鐵骨建築とか、皆燒けない工夫であつて火を出さない工夫ではないのである。

尤も燒くといふ事は火の本能であるから、燒けないといふ工風は防火研究の主眼であるは言ふまでもないが、燒けない工風よりも火を出さない工風の方が、一歩進んだ近道である事も固より言ふまでもない事である。

家は火に依つてのみ焼るか

この火を出さない工風の進まなかつたのは、家は火にかゝつては焼けるにきまつたもので、之れを免れる事は不可能だといふ觀念のみが發達して、之が先入主となり、遂に出火せぬ工風などは夢にも思ひ到らなかつた結果であらうと思ふ。

世に不可思議なる運命といふものが無ければ兎も角、理屈一片では到底説明することの出來ない無形の運命なるものが嚴存する以上防火上にも亦必ず無形の運命に關する工風がなければならぬ。家は唯火に依つてのみ焼けるといふ單純な思想で、運命上の工夫を無用視するやうな物質崇拜者は、到底吾等の説を解する事の出來ない人である。

總て何事に依らず、運命の大なる手に左右せられないものはないので、健康だから長壽するにも限らず、金持だから貧乏せぬとも言

逆に運命を封じ込め得る法

迷信でもない空想でもない

へぬ。自分の意志に依つて自由にすることの出來ない事柄は、畢竟運命の大なる手が自由にせしめないからなのである。

隨つて家にも運命は附纏ふ。既に運命あるからは、運命上の工夫に依つて、逆に運命を封じ込め得る法あるや勿論で、事實の證明は之を否認するを許さない。要するに、火に焼けるといふ物質的な研究の外に、運命の手の領域に屬する精神的な方面の研究をするといふことは、迷信でもなければ空想でもない、誠に大切なる研究である。

そこで、運命上如何にせば出火しない住宅なり事務所なりを建築し得るか、現に建つて居る住宅なり事務所なりが如何にして火災を防ぎ得るか、研究は此二問題にあるのである。

私は曩に論じた事實と理論とに據て、出火は

地相の撰擇
建築の方法
方位の關係

この三點を調和すれば、絶對に火災は豫防し得るものだといふ確信を有するものである。

此の三點を調和すればよい

左に之を說明しやう。

第一は起點と起點との對向

第一　起點と起點の對向的屋敷及び建築を避くること。

起點と起點とは前數章に於て屢々說明した如く最も惡しき對向である。何となれば双方とも始にして其終を全うすることが出來ぬ。故に種々なる不祥事を起し、火災のみならず、一切の關係に於て此起點は最も注意せねばならぬのである。

前に論じた岸和田紡績の本社と工場、瓦斯會社の本社と工場などは、此惡しき對向が火災系となつたもので、本店と支店、本社と工場などは、此の對向を絶對に避けねばならぬ。

又、地相或は住宅を中心として、東北とか西南に當る隅の建物も避けなければならぬ。總て隅は、方位に如何なる關係あるも、東南即ち辰巳、西北即ち戌亥は建て詰めても宜しいが、二隅は明けねばならぬ。此關係に就ては他日說明する機會があらうと思ふ。

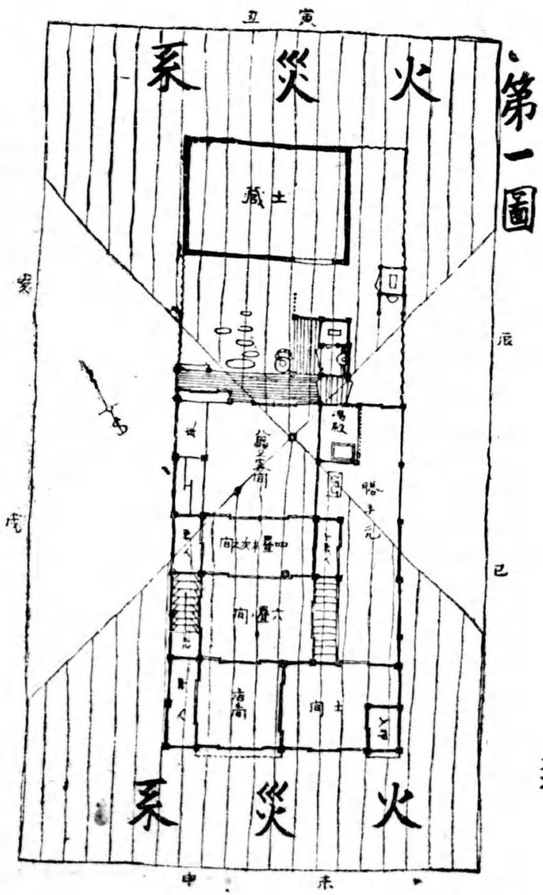
第二は地相と住宅との構へ

第二　地相及び住宅の構へに注意すること。

之は第一圖に示すが如く、地相の撰擇が惡い爲に、如何なる家を建てゝも、全部火災系となるのである。

此圖面は地相と建物との兩者を示したもので、何れより見るも火災のみならず、非常に良からぬ問題の生ずる屋敷である。即ち屋敷も建物も全部が起點の對向であるから、斯の如き地相及び住宅に住

第一圖



む人は、運命上、知らず識らずの間に諸種の問題を喚起して、火災とか其他不祥の出來事續出するに至るのである。

從來の家相見は、家の中心のみを知つて地相の中心を閑却して居るから、斯の如き地相にも全く間違つた鑑定を下して居る。要するに此地相には、如何なる設計をしても、運命上幸福な構へをなすことは出來ない。それは別に實地の圖面に依て詳論し、愕くべき事實を諸君の前に澤山提供するつもりである。

斯の如き地相に住み、住宅の構へをなす人は、一切の事に注意するは勿論、特に火災に甚深の注意を拂ひ、所謂人力に依て此悪しき運命を回轉せしむるより外はない。將來は斷じて擇ぶべき地相でないことを充分覺にて置いて頂きたい。

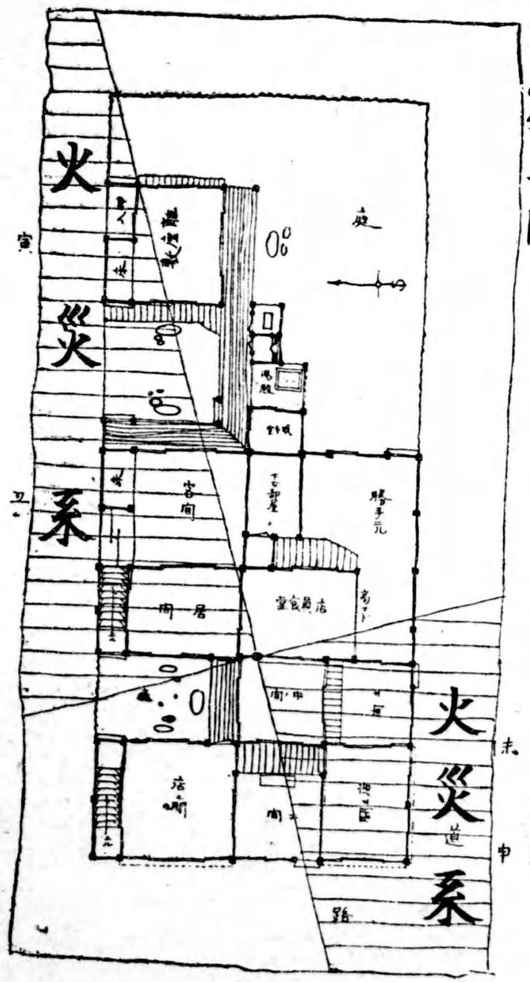
一寸斷つて置くが、此圖面は唯火災系を示したのみで、間取等には一切關係はない。以下の三圖皆同樣である。

第三　火災の部位に注意すること。

第三は火災部位に注意する

第二圖に示したのは、地相の撰擇も其當を得、住宅の構へにも故障はない。（尤も此圖面では離座敷が悪いが、意味はない。）正東西に

第二圖



第四は地相の一隅を避ける

長くして、地相としても完全なり、此地相に構造せらるゝ住宅も大抵は故障のないものである。此圖面では西の便所も悪いし、勝手元も悪いが、併しそれ等に用はない。

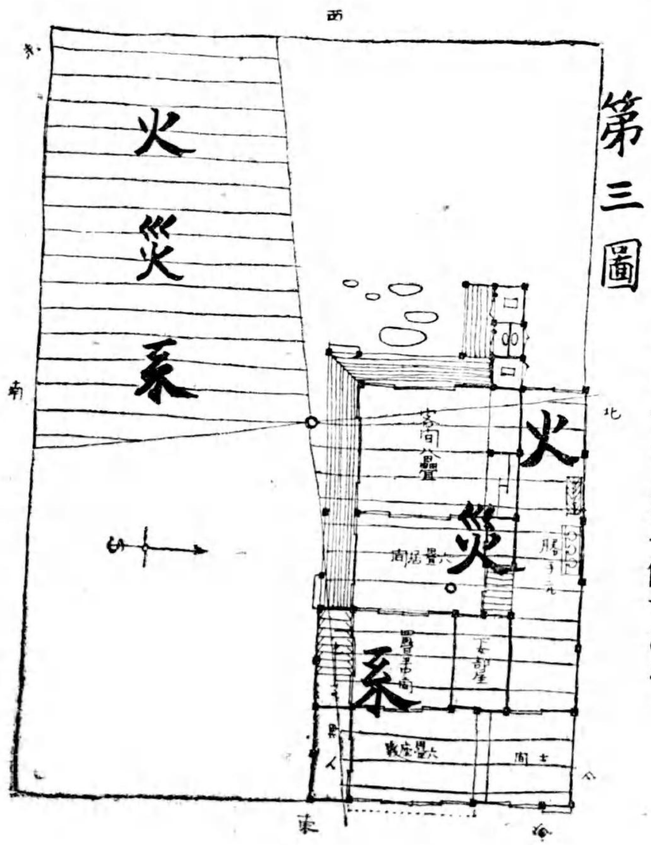
總て建物のある處には必ず火災系がある。然も部分の火災系と全部の火災系との區別がある。地相にも家相にも缺點のない家でも、この火災系には充分注意をせねばならぬ。本圖は之を示したものである。

第四　地相の一隅を避けること。

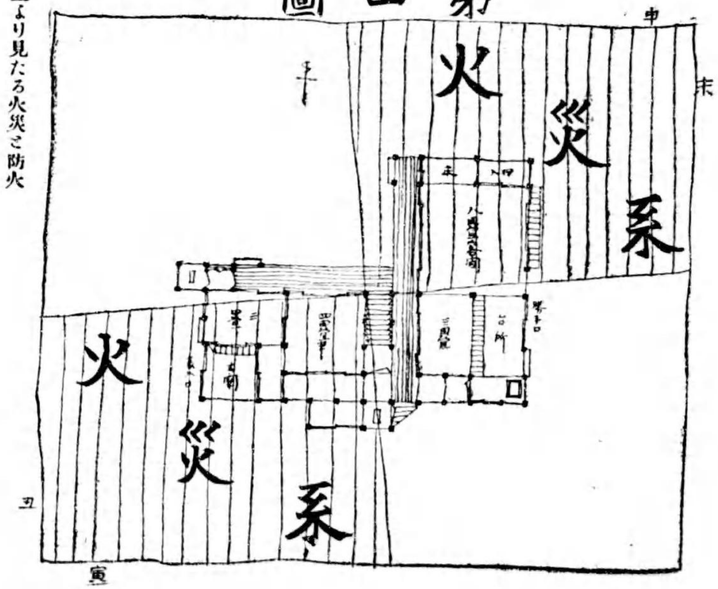
第三圖は、矢張地相の撰擇に其當を得なかつたものである。即ち地相を中心として家を見る時は、家は起點の一方に建てられて居る。前に述べた尾中氏の家も、斯の如き地相に建てられてあつた爲に、屢々火災の厄に遭つたけれども、活動位の辰巳の一隅に轉じて

から之を免れ得たので、此地相のよい一例である。

第三圖



第四圖



第五は建物の對等を避けること

總て屋敷、即ち地相と建物とは調和を得ねばならぬ。中庸に居らねばならぬ。然るに四方の一隅にあるのは、屋敷と建物との調和を根本的に破壞するもので、運命上、是非とも之を避けねばならぬ。火災系は即ち運命に悪しき結果である。

第五　建物の對等を避けること。

第四圖は住宅に中心のないのを示したもので、此間取から見て、何れが本館で何れが附隨館かといふことが知れない。併して此建て方が辰巳と戌亥に張らずして、起點と起點とに對向して居る。構造其儘が火災系となつたのである。

近頃、斯の如き妙な家が澤山建てられるのは、頗る寒心すべき傾向であると思ふ。此住宅の主眼とする處は、辰巳の光線を取ることにある。併し運命上からは勿論、衛生上から言つても、一方の光線のみを取ることは甚だ宜しくない。即ち光線の取り方にも必ず中庸を得て、四方の光線を調和せしめねばならぬ。此圖面の如きは衛生上からも決して良い家とは言へない。斯の如き設計は斷じて避けなければならぬ。これもいづれ別に詳論する時があらう。

單に個人の利害問題でない

以上に於て、火災豫防に關して注意すべき點、即ち如何にして火災は豫防し得べきかといふ研究の範圍を明かにし得た。

火災の研究は單なる個人の利害問題ではない。實に社會的、國家的の大問題である。若しも此論文にして一世の視聽を惹き、幾多の研究を誘致して、私の意見が確實なものとなり防火上の一大革命を起したならば、之に勝る幸福はあるまいと思ふ。私は切に讀者諸君に眞面目なる研究を望んでやまないのである。

大正五年六月廿五日印刷
大正五年七月一日發行

（火災運命觀）
定價金五拾錢

著作兼發行者　大阪市東區今橋二丁目四十三番地　茂公田中菊治郎

印刷者　大阪市東區船越町二丁目三十一番地　山上貞一

印刷所　大阪市東區船越町二丁目三十番地　中央堂印刷所

印鑑なき者は偽本とす

不許複製

發行所　大阪市東區今橋二丁目四十三番地
合資會社　不老禪室
振替貯金口座大阪一四一七八番
電話本局長一一六五番

訂正再版

大德管長見性　宗般禪師題字

其心居士　田中茂公著

家庭と開運

菊版貳百頁　定價壹圓　郵税八錢

開運十則

一先天の運と閨門の自覺、二先天の運と生時關係、▲第三後天の運と自己の自覺、二後天の運と教育、四後天の運と職務

▲第一　緒言　▲第二　先天の運、

十九八七六五四三二一

自己の身體は運命の表彰なること
自己の短所を知ること
自己の長所を修養すること
自己の境遇を自覺すること
自己の人和を知ること
自己の時和を察すること
自己天贈の職業を選むこと
發展機會を察知すること
自己の住宅に注意すること
死に疑著せざること

●田中茂公先生得意の開運論右の目次を見て本書の内容を知り給へれ、御愛讀を乞ふ

大阪市東區今橋二丁目　不老禪室發行　合資會社　振替大阪一四一七八番

電話本局長一一六五番

田中茂公著

住宅運命大觀

菊版五百三十頁布裝金文字製本定價參圓郵税拾貳錢

壹千部に限特價金貳圓五拾錢

◎本書目次◎緒言◎住宅と意思◎住宅と陰陽の方◎常識◎中心論◎地相住宅中心◎土藏の位置◎附屬物の◎實例の住宅◎外務省と其運命◎大則調和◎位置◎早稲田大學と女子大學◎岩倉公爵家の運命◎大阪市の發達道修町の運命其他設計圖寫眞版が澤山に掲載せられてある本書の價値を知らんと欲する人は先づ左の一文を讀まれよ

●五月十六日の大阪毎日新聞第九頁の評論

●住宅運命大觀（田中茂公著）蓋に住宅運命觀、移轉運命觀の二書を著して住宅と運命との交渉を適切に說明した著者は其後孜々として群籍を涉獵し住宅運命の研究を意らす之れを實際に應用して得たる多數の實例に就て眞なる研究より更に進本に溯ほりて住宅と運命との關係を詳說すべく前二書よりも眞理なる相即相關因果循環と陰陽の法則の三者を主として住宅と運命と地相も其中心に住宅の主腦あることを事實と眼と除陽の法則等を論述し次に住宅運命に住む人、住む家の因果上の關係あることを明かにすべく其實例には乃木大將、大隈伯、岩倉公爵、早稲田大學、女子大學、大阪市、外務省等を列擧して頗る面白き說明を與へて居る（定價三圓大阪東區今橋二ノ四三不老禪室）

●此評論にて明かに本書の價値に表彰がある

大阪市東區今橋二丁目　不老禪室發行　合資會社　振替大阪一四一七八番　大阪市北區大淀口

電話本局長一一六五番

第四版

家相と地相の哲理的新書

田中茂公先生著

移轉運命觀

菊判三百頁 ◀定價壹圓廿錢郵稅八錢▶ 圖面八枚入

■移轉には住宅を選定せよ

▲本書は種々の模範圖面にて之を示せり

■移轉には方位に着眼せよ

▲本書は多數の實例を以て之を説明せり

■故に先づ本書を一讀せよ

家に八部位あり。曰く、主人位、妻位、活動位、財産位、健康位、安静位、向上位、及び傍位。一切の運命は此の八部位に表象せらる、八部位とは何ぞ。如何なる働きをなすか。乞ふ本書を見よ。三十餘頁に亘る説明は、立所に之を了解せしめて遺憾なかるべし。

■移轉には好機を利用せよ

▲本書は一目瞭然に其の撰擇を敎へたり

■移轉には原因に注意せよ

▲本書は最も明快に之に解決を與へたり

■故に先づ本書を一讀せよ

大阪市東區今橋二丁目三四 合資會社 不老禪室發行 振替口座大阪一四一七八番

電話本局長一一六五番

第五版

乃木大將書簡

田中茂公著

住宅運命觀

菊判二百頁 ◀定價七十錢郵稅八錢▶ 寫眞八枚入

■自己の運命に疑ひを抱ける人は直に自己の住宅を見よ善き運命も惡しき運命も歴然と住宅に現はるゝか如何

之を本書に知れ

■幾度も失敗する人幾度も不幸の續く人は其惡運命の廻轉を求むる爲住宅を轉せよ是れ成功の秘訣なり

秘訣とは何ぞ

之を本書に問へ

■移轉せんとする人は先づ自己の運命と方位に撰擇するに全力を注ぐべし

本書之を指導す

■住宅或は店舗を新築せんとする人は深く注意せよ地相家相完全なれば一家必ず幸福にして商業も亦必ず繁昌すべし

本書之を證明す

本書目次

大阪府知事 大谷光瑞

新世界ルナパーク 藤田男爵

住友吉左衛門 森下仁丹 梅原龜七 大阪朝日新聞

大阪市東區今橋二丁目三四 合資會社 不老禪室發行 振替口座大阪一四一七八番

電話本局長一一六五番

不老禪室
田中茂公著

人相運命觀

菊版百四十八頁　定價七十錢　郵税六錢

田中茂公は本書の緒言に、人相の善惡を以て人の運命を判斷するの術は、支那に於ても、隨分大昔からであるが、觀相術の鼻祖は印度の達磨大師であると言つた人がある、神相全編にも此語がある、余はこの達磨大師の人相開發說に大に興味を有する者であると說いてある、然して本書は「人相極秘三要靈應之傳」の寫本を根本として、田中茂公の識見に說いたものである、目次は

（一）本傳の由來、（二）觀相の心得、（三）體三才の傳、（四）三體三才九觀の傳、（五）君臣の傳、（六）親緣の厚薄を知るの傳、（七）妻緣の變るか否かを知るの傳（八）至誠の心ある相を知るの傳、（九）發達する人の相を知るの傳、（十）發達せざる者の相を知るの傳、（十一）運氣强き人の相を知るの傳、（十二）人の才知と愚痴とを知るの傳、（十三）人の師となるべきを知るの傳（十四）開運する人か否かの相を知るの傳、（十五）運勢强く長命の相を知るの傳。

此十五項を、第十六項より明かに說いて百項までに菊版百三十八頁まで說いてある、本書を一讀せられたならば、他人の相を觀察して頗る趣味があることを斷言します、

大阪市東區今橋二丁目三四　合資會社不老禪室發行　振替口座大阪一四一七八番
電話本局長一一六五番

不老禪室
田中茂公著

姓名運命觀

菊版百五十頁　定價金七十錢　郵税六錢

田中茂公第一章に「姓名考とは何ぞ」と此問題を解決して居ります、此語に姓名運命觀に就ては凡そ三種の研究法がある、第一が近頃流行の、意義と天地と、乾坤と、五行と、名の字劃運數と、合姓名の運數と此六個條より說くのであります、第二が易理を根本として字劃と人の相生相尅に根柢を置いて、乾兌離震巽坎艮坤の八卦を以て其人の姓名の運命を說くのであります、第三が其源を梵字に發し佛敎を根本として其人の生年月日に依つて、韻鏡より說くのであります、始め弘法大師が主唱して秘密にて眞言宗に傳つて野洲の盛典が出版した。

田中茂公は此韻鏡命名の實例を、（一）加藤高明男爵（二）前陸軍大臣岡市之助氏、（三）海軍中將八代六郎氏大藏大臣武富時敏氏、若槻禮次郎氏、司法大臣尾崎行雄氏、農商務大臣河野廣中氏、大阪每日新聞、大阪朝日新聞を實例にしてあります。

田中茂公は此韻鏡の命名法には頗る苦心して、今日でも命名と實印の鑑定には、必ず韻鏡の歸納、倒反に依るので、康熙字典と、玉篇との二書あらざれば、文字の韻劃を知り得ぬのであります、之を一讀せられたならば姓名と運命は明かに其趣味を解決し得るのであります。

大阪市東區今橋二丁目三四　合資會社不老禪室發行　振替口座大阪一四一七八番
電話本局長一一六五番

賜天覽台覽

不老禪室田中茂公著

訂正第二版

禪學療養

菊版貳百十頁　定價壹圓　郵税八錢

本書は田中茂公が、心身の二見を禪學上より徹底して説いたもので、呼吸と氣合と筋肉とを調節する身體の調息法で、一々寫眞に其調節法の仕方を示したのが第十四回もある、卷頭に日本魂の結晶ぞ　三千年を一貫した身心堅固の此肉は豐太閤も楠公も興國維新の勤業も不生不滅に相續す　今現在の我國の我等が肉に備るぞ　身心堅固の此肉は日本魂の結晶ぞ　と全身に力を罩めて寫眞を自體に示して居る。

【本書の目次】

第一章緒言（心靈萬能説の動搖）　第二章禪とは何ぞや（一禪と因果無人、（二禪と即時即境、（三禪と禪僧、（四職業禪、（五軍人禪、（六美術禪、（七文學禪、（八政治禪、（九教育禪、（十醫師禪、（十一商人禪、（十二農耕禪、（十三禪と信仰）　第三章肉の不滅（肉は法性より來る）、（國家と肉、（肉と生理學の關係、　第四章肉の相續（有無形の感應相續）、（生きると生らるとは同字、（色を好む人に病あるは變則）、　第五章自己實驗（心肉一致と修せ者は身心二見の病者）　第六章健康と發病（心肉一致と修せ（肉も公明正大）、（意思は病の本源）、（無病の自覺）　第七章實地養生法の原理（禪學療養の定義）、（中庸と氣海丹田）　第八章療養法の形式（丹田腹と脂肪腹）、（丹田の説明）　第九章大日本魂禪（日本魂は此五尺の肉なり）、（吾國の歴史は吾等が肉の歴史（日本魂禪の効果）　第十章結論　肉と壽命と安心（大限伯の百二十五歳説）、（人は壽に生きず肉に生く）、（此國家が佛の説く極樂淨土である

以上の目次にて二百廿頁餘を適切に詳説し、實驗したるは本書の主體で此禪學療養にて、生死と、健康と人界とを悟らんと欲する人は是非とも一讀せねばならぬことを確信する。

大阪市東區今橋二丁目三四　合資會社　不老禪室發行　振替口座大阪一四一七八番

電話本局長一一六五番

住宅、會社、工場、設計建築部設置

運命主幹　田中茂公
技師　萩原三平
設計主幹　工學士　眞水英夫
技師　湊嘉一
技師　久保田繁亮

田中茂公は住宅運命觀を明治四十五年に發刊して五版五千部、移轉運命觀を大正元年に發行して四版四千部、住宅運命大觀五百二十二頁を大正五年に一千部を發行して建築物と運命との關係を明かにし、凶相に凶相を現じ、吉相には吉相を現ずる、事實上の實例を詳細に擧げて、大隈伯邸、大阪府知事官舍、早稲田大學、女子大學、外務省、岩倉公爵、乃木大將等殆んど三十餘の實例を擧げて、其運命の存在を論及す、建築物は、相即眞理と、住宅と意思、住宅と常識、住宅と陰陽の方則、地相と建築物との中心論などを三書に詳論して、其運命を明かにして居る。

田中茂公の今日までに設計に鑑定したる其大要を擧げると現在に於て最も活動せらるゝ方のみである、其例を擧げると、大阪天滿の坩堝發明者の中辻氏の大工場、大阪市安土町井上糸店のカタン糸の大工場及び

井上第一工場の高瀬氏の新築邸宅、井上氏の別莊、大阪市南區疊屋町の西洋食器、硝子器、洋食用陶器、諸金屬品の製造で輸出活動の森高氏の工場、京都市新町通り二條日本捺染として彫刻發明者武田氏の大工場及び邸宅、紀州和歌山市の吉田醫學士の吉田病院、同所明樂氏の齒科醫院、住宅は、神戸市元町貿易商製油商の藤田氏の新邸、生島御本家の別邸、元町の西洋織物反物直輸出商の田中氏の邸宅、大阪市土佐堀機械輸出の日和商會主の小島氏の新築邸宅、鳥取市川端町運送業の由谷氏の新築邸宅、同市大正鳥取銀行の頭取小田氏の邸宅新築、新潟市の製油業淺田氏の新築邸宅、新潟縣東浦原郡五十島驛の造林、種蓄牛乳粉の發明大家旗野氏の工場及び邸宅、尾之道市外濱の人造肥料發明の橋本氏工場及び邸宅等で之は大活動方の一部である。

今回眞水工學士の學術上の建築設計と田中茂公の運命上の見地とを相合して、住宅、工場、會社其他の建築物に、完全なる設計を爲し、又運命上の鑑定を爲して、住宅其他の建築物に活動と家庭の團欒を表象して熱心に設計、運命に調和せんとす、今回此設計部を設置したるの趣意である。

大阪市東區今橋二丁目三井物産前
不老禪室田中茂公
電話長本局一一六五番
大阪市北區眞砂町四十二番地
眞水三橋建築事務所
電話北一〇一三番

677
609

終